

第19回

全国若者・
ひきこもり
協同実践交流会
in 関西

報告集

2024 年

12月21日(土)
~ 22日(日)

日常と非日常

交歓する

つくる

まぜよう

いきる



主催：JYC 関西 2024 実行委員会

共催：一般社団法人若者協同実践全国フォーラム

目次

■ 報告集発刊によせて	1
基調報告（再掲）	
■ 草の根から問い、草の根で学びあう	3
全体会 Day1	
■ 「こども・若者の声を聴く」を問い直す	8
居住支援 Day1	
■ 今日は家に帰らない日 泊まれる居場所	12
居場所 Day1	
■ 『居場所』における『同じ』と『違い』	15
家族 Day1	
■ 「家族×支援×若者・ひきこもり×協同実践＝〇〇」	19
当事者 Day1	
■ 自助・対話・つながり それから一当事者活動を知る・考える	22
まどい Day1	
■ まどい分科会：喫茶まどい	26
キャリアブレイク Day1	
■ 心のサードプレイス～キャリアブレイクという考え方～	29
草の根 Day1	
■ 草の根の活動を考える——つくり手たちのライフストーリー	32
表現 Day1,Day2	
■ 「生きる、つながる、ひらく」を支える“表現”を考える	36
経済／地域 Day1,Day2	
■ 自分たちの経済と地域（マルシェ）	39
伝える Day1,Day2	
■ 実践を描く・言葉にする分科会	42
市場化・商品化と若者支援 Day2	
■ 市場化する若者支援 一ロールアウト型支援と向き合うー	50
子若法・こども家庭庁 Day2	
■ どうなる？自治体こども計画	53
遊び Day2	
■ 遊びながら交流する分科会	56
メンタルヘルス Day2	
■ 若者支援とメンタルヘルスー支援する／されるをこえてー	58

報告集発刊によせて

JYC 関西 2024 実行委員

中村 雄介

一般社団法人 YDP

大阪

2024 年 12 月 20 日、21 日に「第 19 回全国若者・ひきこもり協同実践交流会 in 関西」を無事開催することができました。全国から総勢 345 名の方に参加頂き、当事者、支援者、行政関係者、地域住民など立場や所属を超えた草の根活動の交流の機会となりました。ご参加いただいた皆様、大会準備・運営に協力いただいた皆様に心よりお礼申し上げます。

19 回目を迎えた今大会もひきこもり・セルフネグレクトの当事者会関係の方、若者支援団体の職員、高齢・障害分野で働かれている方、アート関係の活動に関わる方、研究者、10 代の若者を支える活動をしている方などなど多様な実践に関わる人が集い、実行委員会形式で準備を進めました。メンバーは 20 代～40 代が中心で、出入り自由なドアが常に開かれていたせいか、会議を重ねれば重ねるだけ、芽づる式にメンバーが増え、終盤の大会の中身を固めていく議論と、初めましての自己紹介が共存する不思議な実行委員会でした。また京都、大阪、和歌山の各現場で実行委員会を開催し、各地の実践に触れながら大会の準備を進めたり、実行委員長を置かず、役割や責任を分担して補い合ったりと新しい大会開催・運営のあり方を模索する大会にもなりました。

会場に関してはこれまでの大会のような大学や大きなホールなどを使用せ

ずに、開催地の地域資源を活用して実施しました。差別や貧困の課題を抱える地域の福祉水準を向上させるために設置された隣保館（らいとぴあ21）をメイン会場に、近隣の小学校の体育館で全体会を開催し（寒さ対策が不十分であった点は深くお詫び致します）、地域の広場を活用したマルシェでの出店を通して、仕事づくりの実践交流が行われ、大会参加者と住民（こども～高齢者）との交流が生まれる機会になりました。

被差別部落という背景を抱えつつも、地域をひらき、参加型、発信型でまちづくりを進めてきた北芝の地域特性と JYC フォーラムが追及してきた協同実践が掛け合わさり、「若者支援を通した地域づくり」という 1 つの可能性を全国から参加された方と共有することができたのではないかと感じています。

これまでほぼ毎年開催してきた実践交流会ですが、コロナ禍を経て求められる全国交流会の形も少しずつ変わってきたこと、全国規模の集まりと同じくらい、各地域やテーマを軸にした実践交流が求められることなどから、今後は 2 年に一度の開催を予定しており、次回は東日本で開催予定です。この報告書で第 19 回の関西大会を振り返りつつ、議論や言語化が足りなかった点について、2 年後に学び合い・交流できることを楽しみに実践を続けたいと思います。



第19回

全国若者・
ひきこもり
協同実践交流会
in 関西



交
歓
す
る

日
常
と
非
日
常

つ
く
る

ま
ど
う

い
き
る



報告集



2024 年

12月21日(土) ~ 22日(日)

草の根から問い、草の根で学びあう

1.「若者協同実践」運動のはじまり

まず、あらためて私たちが提唱している「若者協同実践」について、これまでの経緯を振り返りつつ確認することからはじめたいと思います。

i. 不登校支援からひきこもり支援、そして実践交流会へ

この実践交流会のはじまりの一つは、和歌山県のひきこもり支援団体「エルシティオ」の実践でした。まだ「ひきこもり」や「若者支援」という言葉がそれほど大きく注目されていなかった80年代後半から90年代前半に、和歌山では、80年代後半の教職員組合の運動をしてきた人たちが教育相談に携わり、その人たちの声かけで、和歌山大学の不登校支援サークル「プラットホーム」が活動を始めるようになりました。

2000年代当時、不登校支援をしている団体の多くが直面した課題として、「不登校、その後」の問題があります。「不登校」状態は、学齢期が終われば形式上「終わり」となりますが、卒業後の社会的な受け皿がない状態では、当人のしんどさは残り続けてしまいます。社会的な孤立を余儀なくされるなか、家にとどまらざるをえない状態（「ひきこもり」）におかれた若者たちに対してどんな支援ができるのか、各地で模索が続けられていました。

また一方、和歌山では精神障害者の人たちの社会参加の促進として、働く場をつくろうという作業所運動が盛んになっていました。そうした、教育運動の一環としての不登校支援と、障害者運動の一環としての作業所づくりが合流するかたちで、ひきこもり状態にある人たちとともに、コーヒー焙煎をしながら仲間づくりをしていく場として「共同作業所エルシティオ」が発足しました。そのエルシティオの実践では、元教師とひきこもり経験

者がなかまの自宅を訪問し、居場所の素晴らしさを伝えていく実践や、エルシティオが発してから、現在の理事長たちが、身を挺して仲間と関わる実践が展開されてきました。その後、事務業務を委託実施する事業所「ソーラナ」が立ち上がり、就労継続支援事業として活動しています。また最近では、子どもたちが自由に過ごせる居場所として「えびとおはぎ」という活動もスタートしています。

いずれも、集まってきた仲間たちの「こんなことやってみたい」「こういう場所が必要だ」という声に応じて、仲間たちとともに試行錯誤しながらつくり出していった活動になっています。いわゆる「専門家」による支援ではなく、支援する／されるという一方的な関係を超えて、支援者も当事者も「ともに取り組む」仲間であるということが大事にされてきました。

こうした取り組みをしている団体は少しずつ各地に現れ始めていましたが、明確なモデルがあるわけでもなく、どこも手探りでの模索が続いていました。そこで、こうしたひきこもり支援をしている全国各地の団体が集まり、自分たちの実践を交流し合い、互いに学び合っていこうということで、2006年2月に和歌山にて、「社会的ひきこもり支援者全国実践交流会」が開催されることになりました。これが、本大会の第1回目となります（2005年に大阪にてプレ大会も実施しています）。

ii. 実践の学びあいと協同による実践にむけて

この実践交流会で当初から大事にされてきて、現在にも継承されているのが、「実践に“正解”はないけども、“より良い実践”を求める願いはある。だから、互いに実践を持ち寄り、“よい実践”を互いに探っていこう」という精神です。いわゆる「研修会」だと、専門家や

一流の実践者から「教えを乞う」という形式になりがちで、教える―教えられるという関係に陥りがちです。しかし、実践者同士がフラットに学びあえる場をつくることそれ自体が、実践者にとって最も必要かつ重要な学びの機会である、という含意です。分科会ごとに、報告者や助言者が入ることもありますが、あくまで報告や助言は「フラットな対話」のきっかけづくりに過ぎず、「ありがたいお話を頂戴する」というものではありません。

その後、狭義の「ひきこもり」という括りだけでは捉えきれないしんどさにも向き合っていく必要があるという点、いわゆる「支援」という名称では収まらない実践（居場所づくり、地域づくり、仕事づくりなど）も不可欠だという点、当事者活動や家族会などの取り組みも重要な「実践」の一端であるという点などが徐々に共有されるようになり、大会名も「若者・ひきこもり協同実践交流会」と称するようになりました。この名称変更の際に、私たちが探求してきた実践のあり方・実践哲

学を振り返るなかで登場してきたのが、「若者協同実践」という実践概念でした。

その核にあるのは、「生きづらさを経験した若者たちを支える活動」を土台にしつつ、「若者たちとともに、誰もが自分らしく暮らしていける社会をつくり出していく」という実践の方向性です。一般的に「若者支援」というと、「若者を支援する活動」だと理解されがちですが、若者協同実践では「若者が生きられる場・社会をつくる活動」という把握になります。実践の対象を「若者（人）」に置く（若者を対象化する）のではなく、「若者が生きる場」に据えることで、その場をつくる同志（なにか）として実践者と若者とが向き合える、ということになります。そのことにより、固定化された「支援する―される」という関係性や、「社会への適応」を迫る（「大人にさせる」）支援を実践的に乗り越えていくことが可能になるのではないかと、という期待を「若者協同実践」という語に託しています。

2. 「若者／ひきこもり」をめぐる情勢…こども家庭庁／助成金事業

モデルとなる実践もないまま、「ないならつくる」ということで始められたのが実践交流会ですが、その後「若者支援」「ひきこもり支援」は徐々に広がりを見せるようになり、政策課題にもなっていました。それら政策にどう対峙していくべきか、実践交流会の場でも常に検討が重ねられてきましたが、時代状況は常に変動しており、公的施策も流動的な状況が続いています。

i. 注目が集まる「若者支援」、後景化される「若者支援」

2003年に政府が立てた「若者自立・挑戦プラン」以降、さまざまな若者支援政策が打ち出されるようになり、2010年に子ども・若者育成支援推進法ができ、2023年からはこども家庭庁ができ、「若者支援」や「ひきこもり支援」という言葉は2000年代初頭に比べ、非常に知られる言葉となりました。

ただし、一部の若者のみが「支援の対象」として取り出される傾向は、これまで同様に現在もあります。たとえば2000年代初頭は、

「フリーター対策」として非正規雇用に従事する若者を対象とした就労支援が政策の焦点となってきましたし、2000年代後半では「ニート」と称される若年無業者がターゲットとなり、「自立支援」が謳われていました。その後、生活困窮や発達障害などに推移し、現在では社会的養護の施設退所者や、ヤングケアラーなどに注目が集まっています。もちろん、それぞれの問題状況の改善ははかられる必要がありますし、相応の対処が求められるということはその通りではありますが、ひきこもりは、時になんらかの事件が生じた時に注目をあびる課題となっています。そうしたなかで、社会（大人）の側から「見えやすい課題」の改善へと資源が集中することで、その傍らで放置され続けてしまう若者も出てきます。さらに、個別課題に特化した「支援」の枠組みからは、生存そのものの保障や、余暇・文化の保障、学び・育ちの機会の保障などは後景化しがちです。

そもそも、「若者の生きづらさ」の問題は、表面化してくる諸課題への対処だけで解消さ

れるものではなく、この社会全体の風潮に起因する問題としてあります。実際に表面化してくる課題は多岐にわたりますが、それら課題に直面する若者たちの根底にある「生きづらさ」は地続きの問題としてあり、その解消のためには社会そのものを作り替えていく必要があります。その意味で、「若者を支援する」という視点だけでなく、「若者とともに、もう少し生きやすい社会をつくる」という方向性を実践の核に携えながら、一朝一夕では到達しえないその課題に向き合っていくことが求められてきます。

ii. 「こども・若者の声を聴く」を問い直す

また、これまでの若者支援政策において、若者は「事業の対象」でしかなく、基本的に「大人」の側が設計し実行してきました。「若者のため」と謳いながらも、実際には大人が求める「若者像」から外れた若者を矯正するという思惑が見え隠れする場面も少なくありません。そうした問題について、この会でもこれまで検討が重ねられてきました。

そうした状況に対し、2023年のこども家庭庁発足、こども基本法施行以降、「子ども・若者の声を聴く」ことが明確に掲げられ、取り組みをすすめるようとしています。この取り組みは、確かに重要なことだろうと感じられる一方で、躊躇いも同時に生じさせます。誰が・どこで・どのように聴けるのかという手法の問題だけでなく、大人にとって都合のいい「声」だけが選ばれてしまうのではないか、うめき声や沈黙など「声なき声」に耳を傾けられるのか、聴かれた後はどうなるのか（声の反映という課題）、そもそも「声」とは何か、「聴く」とはということなのか、という根本的な問いも生じてきますし、考えなければならぬことは山積みです。

また一方で、JYCでこれまで大事にしてきたのは「聴く」というよりは「ともに在る／一緒にやる」ということでした。「声の有無」といったことにかかわらず、安心してその場に居られることを保障していくことで、徐々に「声」を取り戻していくことが可能になったり、そこで出てきた「声」をもとに、どんな活動を展開していくか、という部分に焦点

をあてたりしてきました。いずれの場合も、「声を聴く」ということが目的になるのではなく、実践の前提・起点だったり、結果の一端に過ぎないものです。

そうした自分たちの実践の問い直しも含め、あらためて「若者の声を聴く」とはということなのか、全体シンポジウムでの議論・提起を受けつつ、この2日間の大会を通して、皆さんとともに深めていきたいと思います。

iii. 行政委託化と公共化

そしてもう一点、確認しておきたいのは、「若者支援」事業をめぐる公共性の問題です。社会的な注目もさほど高くなく、制度化される以前から若者支援に取り組んできた私たちの取り組みは、何よりもまず「目の前で苦しんでいる若者を放置しておけない」ということを出発点にしています。「個人的な問題」として自己責任化され、孤立状態におかれていた若者に出会っていくなかで、その苦しみは若者個人の問題ではなく、「私たちの問題」であるということに気づき、多様な担い手を巻き込みながら若者協同実践が展開されてきました。しかし、「私たちの問題」にとどまる限り、当事者の周囲だけの取り組みになり、その外側で苦しんでいる若者に届きづらかったりもしますし、社会全体の改善まではなかなか行きつかないもどかしさもあります。

それに対し、若者支援に直接的にはかわっていない人も含め、「みんなの問題」として社会的に共有していくプロセスが「公共化」になります。その具体的な展開の一端が、国や自治体の事業として政策課題に据えられることだったり、課題への対処や実践が法律として明文化されることだったりしますが、世論形成や社会全体における理解の促進もまた、重要な課題となります。

実際、「若者支援」は政策課題に据えられ、さまざまな施策が展開されたりするようになりました。しかし、政策課題に上り事業化されることは、「公共化の推進」という側面だけでなく、行政の内部に市場を展開していくという「官製市場の開拓」という側面も含まれるという点には注意が必要です。実践を展開していくためには、活動に要する費用や

担い手の生活費確保など、相応の資金が不可欠ですが、その継続性や安定性を担保していくためには、公的事業の委託を受けることが最も身近な回路となります。その事業委託をめぐる、団体同士の競争がもたらされ、実践の共有や実践者同士の協同を難しくさせてしまうという構造も生じてきます。さらには、事業費が相応の規模に上るようになると、「事業費収入」を目的にした事業者（「若者支援」は事業費を得るための手段）も参入するようになり、価格の低廉化競争が始まってしまうということも起こります。

他方で、行政委託事業にはさまざまな制約がつきもので、自分たちが大事にしたい実践を歪めねばならなくなったりすることも生じがちです。それに対し、民間の助成金やクラウドファンディングなどで「自分たちの提案する実践」を社会に発信し理解を得ることで、実践を継続させていこうという動きも進められています。休眠預金事業など、政府もかわり実施されている助成事業もありますが、助成事業であれクラウドファンディングであれ、「活動の意義・必要性」と相応の「成果」が求められてしまいます。先にも見たように、活動の社会的意義を発信し理解を促していくことは、それ自体「公共化」の一端ではありますが、資金調達という目的が前面化することで、現場の複雑性・多様性が削ぎ落とされた「わかりやすさ」が先行し、可視化されづらい

周辺部分がいつそう脇に追いやられるという事態が生じてきます。また、「いい実践をしているように見える」ことが重視されるため、実践力量よりも言語化・可視化がうまい事業者が優位に立つ危険性があります。

どちらの動向も、「若者支援」がお金集めのための商材となり、手段・道具になっていくという「支援の商品化」が進んでいきます。そうすると、「希少性・固有性」がある方が商品価値は高くなるという市場メカニズムが働くため、実践のなかで積み上げてきたノウハウは自団体内部で抱え、「強み」や「売り」にしていくことが、資金獲得・団体存続において欠かせないものとなってしまいます。しかしそれでは、当初の課題であった「みんなのものに」という方向性とは真逆の展開が進んでしまい、「若者支援市場」が形成されていく、という顛末になります。

こうした事態に対し、こういった歯止めをかけることができるのか。そこには、政治・行政の課題や資金調達の課題、市民活動に対する評価をめぐる問いなど、さまざまな回路が浮かびますが、「実践を交流・共有しながら、みんなで“より良い実践”を探り、高め合っていく」ということを大事にしてきた私たちは、あらためて原点に立ち返り、「実践の協同化」の回路を堅持し広めていくことを大事にしていきたいと考えています。

3.JYCのこれからの目指す方向性

こうした情勢を踏まえて、JYCとして目指す方向性をいくつか提起したいと思います。

i. 学び合い、支え合いを大事にして

JYCは最初にもお話したように、集まって知恵を出し合う中で、困っていることに対して明確な答えは出ないかもしれないとしても、何かヒントが見えてくるのではないかと、という思いから始まっています。目立つ実践者や、研究者が答えを出したり、一方的に講義をするのではなく、相互の学びあいのなかで、立場をこえて、各自の実践や考えを深め、社会の在り方を考えられる場をつくることを目指してきましたし、これからも目指してい

きます。そのために、制度施策の情勢を把握しながら全国各地の地域づくり、草の根運動を励ましあい支え合うことのできるプラットフォーム機能を重視します。

ii. 方向性をもとに、今後 JYC が具体的に取り組むこと

この方向性のもとに、第一に、実践交流会（2年に1度の開催）を開催し続けます。これまでは毎年開催していましたが、今後は2年に一度とし、東日本と西日本、と交互に実施予定です。これまで19回にわたり開催していく中で、交流会の規模が大きくなり、1,000人規模の大会になることもありまし

た。ただし、大会の開催は手段であったはずが目的化してしまい、本来の目的である「実践交流」「開催地域のネットワークづくり」に重きをおくことが難しくなってきたこともあり、また、そのため、大会づくりを通して「地域のネットワークづくり」をすること、大会で「実践交流」をすることの本来の目的に立ち返るため、大会の開催規模を小中規模化し、開催回数も2年に一度の開催とすることにしました。

第二に、小さな実践交流会を実施していきます。はじめは2015年の福島大会に関わった若手支援者が「もっと交流を深めたい」と思い企画した20～30人規模の実践交流会でした。2016年度から年に1回（2018年度は年3回）開催を続け、コロナ禍では中断したものの2024年度に再開しています。20～30代を参加者の中心に置き、支援者・当事者・学生問わず、「協同実践」について考えたり、生き方や働き方等を模索したりと食べたり飲んだりしながら1泊2日の合宿形式で開催していきます。

第三に、研究フォーラム（サマーフォーラム）があります。研究フォーラムは、2017年度から開催しており、若者が生きる社会の現状や、支援施策に係る情勢などについて、実践者と研究者が一緒になって探究活動を進めています。現場の実践に根ざしつつも、「目の前の課題への対処」というだけでなく、現実認識のための概念枠組みの検証や、社会そのもののあり方の検討まで含め、「そもそも論」に立ち返りながらの議論を積み重ねてい

ます。

第四に、学びあう機会づくりを企画します。コロナ禍で交流が難しくなった状況下で、オンライン上の学びの企画がうまれました。それぞれの現場で浮かんだ気づきや課題を出し合い、相互に学び実践を深めていく活動は、時間・空間を超えて積み重ねていく必要があります。現在は不定期開催となっていますが、今後は定期開催を目指していきます。また、それ以前から実施してきた、若者支援に係る研究者・実践者が集まり、実践・研究を深めるための場も状況に応じて開催していきたいと思っています。

iii. 草の根の実践・運動

最後に、JYCは草の根の実践・運動を大切にすることを確認して終わりたいと思います。他の生活を支える実践と同様に、若者やひきこもっている人々との活動は、地域で暮らす一人一人によってつくられ、支えられてきました。予算事業ができ、委託事業が競争入札化し、大きな助成事業に振り回され、資金調達「戦略」や広報「戦略」などが溢れる状況のなかでも、立ち返る点は、草の根という点にあるのではないのでしょうか。

団体や事業を大きくしていくことを「成功」とするのではなく、目の前の若者が望む社会、生きていくことのできる社会を彼らと共につくっていくこと、小さくても地道な活動を育んでいくこと、そんな実践をもちより、語り合い、励まし合える場をこれからも作っていきたいと考えています。

「こども・若者の声を聴く」を問い直す

1. 趣旨

2023年にこども家庭庁が発足し、こども基本法が施行された。「こどもまんなか社会」が謳われ、子どもや若者の意見を政策に反映していくことが国および地方公共団体には求められることになった。この会は、こうして突如として強調されるようになった「子ども・若者の声を聴く」という動向に対して、立ち止まって考える機会となるよう構想された。

そもそも「子ども・若者の声を聴く」という営みは、実践現場においては特別のことではないはずだ。目の前の子ども・若者との対話から活動が生み出され、共に作りなおし、発展させていくプロセスを多くの実践者は経験してきているだろう。その一方で、本当に声を拾えているのか、不利な状況にあり小さく消え入りそうな声は見過ごされてきてはいな

2. 栗田隆子さんからの問題提起

(1) こどもなのに大人のような違和感

こども家庭庁で行われている「こども若者いけん★ぷらす」は、「こども・若者が様々な方法で自分の意見を表明し、社会に参加することができる取組」だ。子ども自らがサイトにアクセスし、身分証明書や16歳未満の場合は親の同意をもらうことでメンバーになれる。メンバーは、対面・オンライン・チャット・アンケートなどの方法や関心のあるテーマを選んで意見を発信する。

これに対し栗田さんは「それってもう大人みたいな子どもじゃん」と投げかけた。「中学生だけど実際は大人みたいな人の声、大人にとって都合のいい声しか聞き取れないのではないか」ということだ。「子どもに聴いているのに大人のように」というちぐはぐな違和感を、栗田さんは大人の自分が中学校時の体育着を着用して登壇することで可視化してみせた。

(2) 声を出すこと

栗田さんは自身の不登校経験を振り返り、「声を聴くというより、まず声が発せない。自分の気持ちを伝えられるような言葉を、自分の生きている環境の中でみつけれない苦労があった」と語った。当時は「不登校は誰にでも起こりうる」という文部省の声明が出る前で、学校に行くことが当然視されていた時代。ぐちゃぐちゃになる思いを重ねられるよ

うかを鋭く問うことの重要性は強調してもしすぎることはない。

また、聴かれる側からすると、「急に声を聴きたいと言われたって困る」「何を話せばいいのかわからない」という率直な思いも聞こえてくる。会場からは「まず今まで無視してきたことを謝れと思います」といった意見もあり、これまでさまざまなかたちで「声」が抑圧され、軽視されてきた歴史への反省や総括なしにこうした動きが進められることへの違和感もある。

以上を受け、「こども・若者の声を聴く」をテーマに、その動向や取り組みの危うさを考えると共に、協働実践者として「声を聴く」営みをふりかえり、展望していく機会にしたい。

うな言葉は周囲になかった。その意味で、「子どもの思いを伝えられる言葉のある環境なのかが問われている」と強調した。

また、「子どもの声じゃなく私の声だよ!」という当たり前なのに抜け落ちがちな視点についても提起がされた。栗田さん自身が「子どもらしくない子ども」と言われてきたことにも触れながら、「子どもっていうより私」であり、子どもだから大人だから聴くということではなく「私の声を聴いてほしい」と話した。

(3) 聴く大変さ

そもそも、自分たちに都合のいい声であれば私たちはすでにいくらかも聞いているのではないか。一方で、声を聴くとわざわざ言わないといけないようなことは、動いている組織に一旦ストップをかけるような、大人側にとって耳の痛いことだったりする。そういう声を聴くことがどれほど大変なことなのか、本当に認識したうえで政策が進められているのかについても疑問が呈された。

大人の世界でみれば、パブリックコメントに意見を出しても、それが必ず取り上げられるわけでも、再検討につながるわけでもない。あるいは、労働問題が生じたとき、雇用主側が労働者側の話を聞きたがらないことは多い。栗田さんは労働運動をするなかで、直接雇用ではなく業務委託などの形態を増や

すなどして、労働者側の話を聞かないで済むような仕組みにたくさん出会ってきたという。そういうことが広がる社会のなかで子どもの声を聴くと言っても本当にできるのか、と思わざるを得ないと語った。

3. 「子ども・若者の声を聴かせて」に対する若者へのアンケート結果

続いて、今回大会の実行委員会メンバーが関わっている現場で若者にアンケートを行った結果について報告があった。回答件数は24件、うち開示許可を得られたのは18件であり限られたデータではあるものの、「こども・若者の声を聴く」動向に対する若者の感覚の一端が垣間見える。

まず、こども家庭庁から「声を聴こう」という発信がなされていることについて知っている人と知らない人の割合はほぼ半々だった。「あなたの声を聴かせてくださいと言われたときに感じることを」を尋ねた質問では、知らない相手から聴かれるのと、親や親戚、学校の先生、居場所やユースセンター等の大人、バイト先や職場の大人などの知り合いから聴かれるのでは、回答傾向に違いがみられた。知り合いに聴かれる方が「協力しようと思う」回答が伸び、

4. 横江さんからの問題提起

(1) ユースセンターでの「声を聴く」とは

横江さんは京都市のユースセンターで働いている。午前中には学校に行っていない子が来たり、放課後には学校帰りの中高生が来たりして、思い思いの時間を過ごす場だ。ユースセンターには二つの側面がある。一つは「大人になるための学び」であり、ぼーっとしたり友達とわちゃわちゃ過ごしたりといった日常的な空間のなかで生じている。もう一つは「問題解決を手助けする」ものであり、学習支援やヤングケアラー、高校中退予防などの事業がある。ユースセンターのロビーでは支援というよりは学びの場をつくるイメージで日々を過ごしており、今回は、どんなふうに日常的に若者の声に耳を傾けているのかというところについて、実際のエピソードを交えて話題提供が行われた。

(2) 仲間とともに紡がれていくことば

高校生年代の5-10人程度のボランティアが集まり、フリーペーパーを発行する事業のストーリーが語られた。それくらいの年代の子たちが集まると、編集会議の3/4はおしゃべりになる。あるときAさんが「私は学校で変人って言われる」と言い、男子にからかわれると話し始めたという。それに対しBくんが「そんな暗い話しないで」と話を遮り、Aさんはうつむいてしまったが、そこにCさんが「最後まで聴こうよ」と声をかけてくれた。そこからA

結局「仕事をしたふり」「聴いたふり」だけにならないだろうか、と懸念が示された。

知らない人からの場合は「内容によっては答えようと思う」が増加した。また、「聞かれて答えた内容がどう扱われるか気になる」と回答した人も、知らない人から聞かれた場合により多かった。

さらに、「自分の考えなどを「言ってもいいな」と思うのはなぜですか」という質問に対しては、聞かれた内容に興味関心があったり、自分に関わったりするといった内容面に関する項目と、話しやすい雰囲気や相手がきちんと聞いてくれるなどといった話す場や話す相手に関する項目が多く選択されていた。逆に、「言いたくないな」と思う理由としては、「何を言ってもいいかわからないから」が最多で、「言っても何も変わらないと思うから」が次いで多いという結果が報告された。

さんはとつとつと話し始め、さらに他のメンバーがそのことをフリーペーパーに書いてみたらと提案するようなことがあった。

かれらは週1回も集まらないようなグループで、お互いの高校や家庭生活などまったく知らない者同士だ。しかし、だからこそ話せることがあり、「弱いけど豊かなつながり」がそこにはあるのではないかと横江さんはいう。そして、その場で「仲間とともに紡がれていくことば」があったのではないかと語った。

(3) 圧倒的な不利な暮らしのなかでことばを手にする

もう一つのエピソードは、圧倒的に不利な暮らしのなかで生きてきた二人の若者のストーリーだ。一人は万引きやシンナーなどの逸脱行為を繰り返していた少年だったが、少年院の識字教育で文字が読めるようになって帰ってきた。センターに来て新聞を読んでくれた時の嬉しそうな顔は忘れられないという。もう一人は家事を一手に引き受けていた女子中学生で、先生を殴るなどの事件も起こしていたが、中学卒業後再びセンターに来た時には働き始めて言葉も豊かになっていたようだ。

二人に共通していたのは、自分の思いを言葉にできずイライラした結果、手が出てしまったり挑発されたと思ったりして、周囲とぶつかってしまう様子

だった。「誰も自分の言うことなんか信じてくれない」「どうなってもいい」とあきらめてしまうこともあったという。そのなかで、かれらが言葉を獲得していくプロセスに横江さん自身がかかわっていたし、少年院や会社など様々な人がかかわっていたからこそ、かれらは言葉を獲得していったのではないかと話した。

5. 会場での意見交流

以上を受け、会場からは様々な意見や考えたいテーマが出された。

- ・書ける人、言える人だけの声になっていることは私も問題視しており、明快に言ってもらえて良かった
- ・聴かせてほしい、という言葉そのものが大人の意図でしかない
- ・結局は大人がこういう声を聴きたい、という望んでいる言葉しか聴こうとしていない気がします。自分たちにとって都合のいい言葉を切り取ってマスコミにも流していない気がします。なにも変わりはないという無力感を若者にも広げさせているのでは…
- ・本当の声を聴くまでにどれだけ時間がかかるのか、そもそも声を聴くとは何かということを定義した上で、どんなステップが必要かを検討しないといけないだろうと思う
- ・聞かせてほしいって聞くなら、行動につなげてほしい いじめのアンケートとか聞いたくせに 全然対応もなかった、失望
- ・居場所利用者です。栗田さんの意見に共感します。そもそも声をあげることが大変な方が多いです。そんな中で声を出しても採用されないのなら、支援者に言うメリットがありません。
- ・若者に限らずだと思うが、関係値の中でしか本当の声は聞くことができないと思う。考えたいことは以下。では、その声をどう反映していくか、関係を築くために何が必要か、大人（事業、政策な

最近ではユースカウンスルや地方若者議会のようなものも多く行われるようになってきたが、そのような場に二人のような中卒で社会に投げ出されていく若者の声が出てくるかといえばそうではない。それを私たちがどうあげていくか、伝えていくことができるのか課題ではないだろうか提起された。

ど実際反映する人）がその意見を曲解せずどう参考にしていくか。

- ・信頼できない不信ということは伝わってきたが、その他の問題意識はなんだろう？どのように個々の声を社会化するか？協同実践はなにか解決する回路となるか？
- ・アプローチに問題はあるかもしれないけど、まず「1」を始めないと、何ごとも始まらないと思う。「1」を始めたから、全体会で上がるような疑問や問題提起が始まった。まず「1」を作ったことは、もう少し好意的な反応を示しても良いのかもしれないかな、とも感じた。
- ・もしかしたら日頃かかわっている若者の声を、見落としてしまっているのかもしれないと感じた。日常のかかわりを大事にしたいと改めて感じた。

以上、すべてを載せることはできていない。取捨選択によって結果的にさまざまな「声」に軽重をつけている点は、まさに「声を聴く」とこととそれにどう応じるのかの難しさが現れているともいえる。

最後に会場では、上記意見も参考にしつつ「声を聴く」ことをめぐって感じていることや議論したいテーマについてグループで交流する時間がもたれた。議論するテーマを焦点化した方がより深まったかもしれないという課題は残るが、「声を聴く」動向についての問題意識の共有と自身の振り返りをする機会にはなったのではないかと思われる。

Day1

21日(土)

15:15-17:45

分科会

居住支援

今日は家に帰らない日 泊まれる居場所

家族



家族 × 支援者 × 若者・ひきこもり
× 協同実践=〇〇

まどい

まどい分科会～喫茶まどる

居場所

『居場所』における『同じ』と『違い』

当事者

自助・対話・つながり それから——
当事者活動を知る・考える

キャリア ブレイク



～キャリアブレイクという考え方～

草の根

草の根の活動を考える——
つくり手たちのライフストーリー

Day1

21日(土)

15:15-17:45

表現



「生きる、つながる、ひらく」を
支える“表現”を考える

経済／地域



自分たちの経済と地域（マルシェ）

伝える



実践を描く・言葉にする分科会

フリンジ



関西フリンジひょうげん交流企画 2024

Day2

22日(日)

9:30-12:30

分散会

Day2

22日(日)

9:30-12:30

自治体こども計画



市場化・商品化と若者支援



遊びながら交流する分科会



若者支援とメンタルヘルス



フットサル交流



13:00-16:00

フィールドワーク

当事者団体の活動を学ぶ



13:00-16:00

フィールドワーク

開催地のまちづくりを知る



10:00-12:00

今日は家に帰らない日 泊まれる居場所

執筆者：岡部 茜

これまで JYC では、「住まい」に関わる取り組みとして各地の共同生活の形でとりくむ実践を中心に報告と議論、交流を重ねてきた。そうした活動は基本的には、数か月や数年の期間で若者たちが入居するものであったが、今回は 1 日単位の短期の宿泊に焦点を当てて報告、議論をしていくこととした。

こうした短期の宿泊は、困難な生活環境のなかで、なんとか生き延びるための一息つける場所として存在しており、「レスパイト」や「ショートステイ」と呼ばれることもある。そしてこれらは、「泊まれる居場所」と表現できるようなものでもあり、居住支援と居場所のあいだに位置するような取り組みでもある。制度による事業としてあるわけではなく、今回報告いただく 3 つの団体いずれも、かかわる人々の状況に応じて試行錯誤のなかで取り組まれている活動である。各団体の活動報告を受けて、議論・交流をすすめたい。

コーディネーター

岡部 茜

大谷大学

京都

報告者

泉 翔

NPO 法人ウィークタイ

大阪

木村 友香理

NPO 法人コミュニティ・スペース sacula

京都

竹田 明子

公益財団法人京都市ユースサービス協会

京都

* 報告概要

一木村友香理さん報告概要 (NPO 法人コミュニティ・スペース sacula)

コミュニティ・スペース sacula は、居場所づくりや相談サポート、コミュニティ・カフェ（すずなりランタン）などの取組をおこなっており、また広報・講演活動を通して若者の状況や活動を発信している。住まいに関する活動としては、相談のなかで「門限が 18 時で何もできない」「親の顔をうかがって生きるのに慣れてしまった。この環境から抜け出したい!」といった声を受けて、自立サポートシェアハウス「サクラソウ」をはじめた。また「親と少しでいいから離れたい」「ひとり部屋でゆっくり寝たい」といった「宿泊」を必要とする声を受けて、短期宿泊サポートの活動も取り組みは始めている。

自立サポートシェアハウス「サクラソウ」は女性対象のシェアハウスだが、短期宿泊サポートは、ジェンダーに関係なく利用できるようになっていく。短期宿泊サポートの利用申込は公式 LINE か

ら受け付けており、1泊から7泊程度の利用が多い。利用料は、1泊1,000円で、食事は当団体が実施するコミュニティ・カフェのすずなりランタンにて無料で食べることができる。とはいえ1泊1,000円を払うことができない人も結構多く、カフェのお手伝いなどをしてもらって無料にしたりもしている。2023年度の宿泊対応数はのべ74名、2024年度の上半期宿泊対応数（4月～9月）はのべ36名である。活動は広く宣伝していないにもかかわらず、関係者や若者同士の繋がりがこのくらいの利用があるのが現状となっている。自立のためには「依存」が必要で、それは頼れる存在、「ひとりじゃない」と思える関係や場があること。saculaでは、「ここにいていいんだ」「ここにいたい」という安心感を支えるとともに、「チャレンジ」も「失敗」もできる社会を地域というところから広げていけたらと考えている。

一竹田明子さん報告概要（公益財団法人京都市ユースサービス協会）

京都市ユースサービス協会は、若者の自己成長を支えるユースサービスの理念のもと、居場所づくりや自主活動支援、相談事業等に取り組んでいる。日々のユースセンターの事業や相談事業、子ども・若者ケアラーの事例検討会や夜のユースセンター活動などを通じて、家族を頼ることができず多様な困難を抱えている若者に出会ってきた。そのなかで、市民の寄付やヤングケアラー支援に取り組む YCARP さんからの委託があり、「おりおりのいえ」の取り組みが実現した。「おりおりのいえ」のコンセプトは「ときどき帰れる、まちのいえ。」。

この場合は、「家」から少し離れて休憩したい若者のための場で、利用料は無料（上限はあるものの交通費補助あり）、申込は、初回は専用フォームからエントリーしてもらい、2 回目以降は公式 LINE でも可としている。「おりおりのいえ」の具体的な活動としては、日中開放のフリースペース

として利用できる【ひなか】、交流したり体験したりするプログラムである【ひなプロ】、そして短期宿泊のおうちとして利用できる【よさり】がある。【よさり】は事前申し込制の利用で、個室での宿泊が最大3泊まで可能となっている。食事は自分でつくってもよいし、事前に希望があればスタッフが作ることもできるようになっており、実際には9割スタッフがつくっている。2023年10月から2024年9月までの利用は述べ54泊。1年の運営を通し、「休憩」「レスパイト」にも様々な形・ニーズがあることがわかってきた。今後は、ヒト・ハコ・カネと、おりおりを基地にしてどのように人のつながりを増やしていけるかが課題となっている。少しでも「ほっ」とできる時間や場が増え、何かあってもなくても、ゆるくつながり続けられる「基地」になればと考えて活動している。

一泉翔さん報告概要（NPO 法人ウィークタイ）

ウィークタイは当事者グループとして、孤独感や生きづらい思いを抱えている様々なマイノリティの若者を対象に、共に生きるための様々な活動をしている。とよなかりレーションハウスという活動拠点を中心にイベントなどもやっており、コロナ禍に様々な場所に人々が居づらくなるなかでも活動を続け、非常に多くの人々がやってくるようになった。そのなかで、来ている人の一人が、コロナ禍で父親が家にいるようになり、「このままだと父親を殺してしまう」と話したことがあった。それならここに居たらどうかと言って、そこから住まいについての活動をするようになった。

現在、「春日ベース」（基本利用料：1日5,000円）と「とよなかりレーションハウス」（基本利用料：1日1,000円）の二箇所を、自宅に帰りたくないなどの事情のある人、ひとりで夜を過ごすことが耐えられないという人に使ってもらえるように

している。利用料については、各種割引があり、事情のある人は無料でも泊まれるようになっている。2023年のシェルター・レスパイトサービスの利用は述べ198名。しかし、家から逃げて一晩すぐすだけではどうにもならないものもあると感じている。家族から逃げてもどんどん遁走する。居場所にいてもしんどくなる。ウィークタイは「ひきこもり」の問題を、「生きる方法」が無いことではなく、「生きる意味」が無くなっていることにあると考えている。最近、ウィークタイでは若者と一緒に海外に出かけており、そこでの体験がとても意味があるものになっていると感じている。レスパイトという実践は、支援や福祉を含む「社会」に対する呪詛を抱く若者と共に生きていくということでもある。「レスパイト」と活動と呼んでいるが、私たちは何からレスパイトするのかということも考えたい。

* 議論の内容

3団体の報告をうけて議論をすすめた。ここでは、一部に限定されるものの、報告者なりに議論内容をかいつまんでまとめてみたい。

まず、ウィークタイの報告のなかには「私たちは何からレスパイトするのか」という問いが入っていた。これについて、竹田さんと木村さんから意見をいただいた。竹田さんからは、一人暮らしの若者も利用しておりつながりを求めることから

「さみしさからのレスパイト」という点と、日常に疲れているところから違う疲れを感じにくること、それを感じられる非日常性が重要であること、つまり「日常からのレスパイト」という点が話された。また木村さんからは、「事象から物理的に距離をとる」ということはレスパイトの意味として本人に伝えているというお話があった。LINEなどSNSの距離感を取れないが、対面の物理的

距離をとることは重要でそれが短期宿泊では可能であることが指摘された。泉さんからは、お二人の意見をうけて、ハームリダクションⁱを自分たちはやっているのではないかと、苦しい日常からレスパイトしたくて、そのためには非日常が重要ではないか、というコメントがあった。焚火をしたり、よくわからないことをすることがレスパイトに重要なのではないかという。こうした三人の発言から、筆者は、短期宿泊が単純に「箱」として、「宿」として存在していることだけでなく、その場やそこで得られる体験・関係が、日常においてからめとられている関係性や状況からレスパイト（休息）させてくれるのではないかと、という示唆を受けた。つまり、レスパイトの実践は逃げる場を物理的に提供するだけでなく、そこにある歓待の体験・関係、非日常性が日常からの休息をもたらすのではないかと。

また、宿泊や居住というものは、公／私の境界をつくりづらい。泉さんはこれを「公私が溶け出す」と表現した。これについても三人からの意見をうかがった。木村さん自身は公私の区別があまりないがスタッフは苦労していたりするという。支援という言葉が苦手で、saculaでは「一緒にやる」というかわりを重視している。仕事としてやるではないし、でも仲間・友人でもない、一緒にやるという感覚である。竹田さんは、スタッフに関して言えば、スタッフは「おりおり」に来るととても疲れるというから、公私を分けていると思うと話された。一方のユーザーは、スタッフのことを「おりおりの人」と思っている。竹田さ

*まとめ、今後の課題等

今回は、JYCの分科会でも長く継続している「居住（支援）分科会」で、これまでテーマとしてこなかった短期の宿泊を支える実践に注目して、3団体から報告をいただいた。若者への居住支援のなかでも、短期の宿泊の実践は多くはない（公表されている情報としては）。そうしたなかで、若者の状況に応答して試行錯誤のなかで取り組まれる実践からの示唆は大きい。「レスパイト」という言葉から今回も非常に示唆的な議論があった。

ん自身は組織の中に身を置いており、ここにいるからこそ出会えたこと・できたことがあるから組織の人間だと感じているが、公私は溶け出している気がするともいう。泉さんは、当事者団体として「支援」への嫌さがあり、ウィークタイで「支援」をするキャラはつくる必要はない。とはいえ、ウィークタイに来るときに、それぞれが何かを演じてはいるという。こうしたそれぞれのお話からは、公私をこえて、「支援」に対するそれぞれの現場や人々の興味深いスタンスもうかがえるように思う。

会場からは、大家さんとの関係や自立に向けた支援についての質問があった。紙幅の関係上、大家さんとの関係について記載する。saculaでは、大家さんがカフェに食べに来てくれる関係があり、若者のことも応援してもらっている。おりおりのいえでも、元職員の繋がりで出会った大家さんであり、また拠点自体がもともと留学生用のシェアハウスだったこともあって、若者が使うことに際して近隣や大家さんの理解はとてもあるという。ニューズレターをつくって送るときもあるとのことだった。ウィークタイでは、2003年くらいからやってたときは住み開きという形でやっており、若い男性が出入りするため何かのアジトかと思われて通報されるなどして、2回退居したと聞いているという。現在は、市の住宅協会からのサブリースで契約しており、現状回復の義務がないので、壁を取りはらうなど非常に柔軟に使用できている。

今後も、多様な住まいに関わる実践について、情報交換と議論を進めていきたい。

また、この分科会は、これまで10人～20人の参加者で実施してきた比較的小さめの分科会であったが、今回は30～40人ほどの参加があり、ややレクチャー型になってしまった。この点はコーディネーターの反省点であり、小グループに分けた議論の時間の確保など、レクチャー型にならないような工夫を今後は検討する必要がある。

ⁱ Harm Reduction。直訳すれば「害」の低減であり、薬物依存症への実践、指針、政策などを中心に議論される概念である。個人が現状の習慣・行為（薬物使用など）を中止することではなく、それに伴うダメージを減らすことを目的とする取り組み。

『居場所』における『同じ』と『違い』

執筆者：佐藤 紀鈴

この分科会では、「居場所」での「同じこと・違うこと」について考えます。私は日頃10代の人が多めなユースセンターで働いているのですが、年々開いていく年齢差には惑いがあります。もう、かれらほど若くないという意識がありますが、かといって「大人」として割り切って見守ったり、介入したり、頼られたりできるほどには成熟していないようにも思います。同じものを持っていること、なんらかのピア性を重視しているという意味では様々な当事者グループでもこうした「同じこと、違うこと」の間を生きていくことになるのかなと思います。

私は同じであることを追求することも違いを求めることも様々な文脈でしてきた覚えがありますが、常に惑いがあります。加えて、それらを明文化せずに通り過ぎてきた部分も多々あるのですが、この分科会では「居場所」という場における「同じこと」と「違うこと」について来て下さった皆さんと感じたり考えたりしたいと思います。

「居場所」で過ごす時間が今や未来の「幸福」を追求するささやかな糧になるといいなと思います。

コーディネーター

佐藤 紀鈴	(公財) 京都市ユースサービス協会 (南青少年活動センター)	京都
御旅屋 達	立命館大学	京都

登壇者

清水 方人	(公財) 京都市ユースサービス協会 (山科青少年活動センター)	京都
内藤 れん	一般社団法人にじーず	京都・兵庫・大阪
八木 智大	NPO 法人ウィークタイ	大阪
山根 広大	NPO 法人ウィークタイ	大阪

概要

私たちは、どのように「居場所」で「同じ」と「違い」を感じ、取り扱っているのかについて意見交換できる分科会を実施しました。「居場所」と一口に言っても、理念やその開き方は、色々であると思います。今回はできるだけ広くお話が聞けるよう、オープンアクセスのユースセンター/LGBT (かもしれない) ユースの「居場所」/「生

きづらさ」を抱えた若年当事者の場づくり/に関わる方々に話題提供いただきました。「同じ」を共有できることと等しく、「何か違うな」と感じる「居場所」での時間が、自分を掘げたり自分以外の人たちともっと良い感じの社会をつくる未来につながっているとよいなと思いました。

話題提供

「“すべての若者” が気兼ねなく集える場づくり」

清水方人さん 山科青少年活動センターユースワーカー / (公財) 京都市ユースサービス協会

子育てと近い将来にビンテージと呼ばれそうな腕時計収集に夢中な清水さんは、「移行期」の若者のサポートに様々な方向から取り組む京都市ユースサービス協会の紹介にはじまり、困りや課題に関わらず京都市内の「青少年」全般にひらかれている「青少年活動センター」とりわけ、山科

区のセンターで「“すべての若者” が安心して過ごせる」場づくりを日々どのように模索しているのかについてお話されました。非行傾向やコミュニケーションへの不安感を明示する若者たちと、自分たちで過ごしたい・過ごすことのできる「普通」の若者たち、いずれもがセンターを必要とし

同じ場集っている状況のある中でワーカーとして、また施設の管理者として、来館する様々な「青少年」をどのようにみて、それぞれにどれくらい

どのようなやりかたで介入し、また見守るのかについて「同じと違い」をキーワードにご検討いただきました。

「LGBT」が居やすい居場所ってどんなところ？」

内藤れんさんにじーず関西リーダー／一般社団法人にじーずスタッフ

和服やスイーツづくり、「スキウサギ」等々が好きな「女子として生まれたことにはプライドを持っているけど、男子として生きたくて男子として生きている人」内藤さんには、「LGBT」や「SOGI」等の「居場所」運営の前提となる概念について説明をいただいた上で、「にじーず」についてご紹介いただきました。参加するユースを守ることができるように定めたセーフガードの指針やスタッフと参加ユース同士でお互いを尊重できるように作成されたルールの共有のほか、「本当の自分を隠さずに過ごせる場所がない」「安心して悩みを相談できる相手がいない」状況になりや

すい課題に対応して、居場所づくりと困りごとの相談にのる取り組みを継続していることをお伝えいただきました。参加ユースは、「LGBT（そうかもしれない人を含む）」であるという共通性をもっている一方で、それ以外は同じではないために様々な違いもあり、例えば、家庭環境の「違い」を感じとり「円満な家庭」で育ったユースがショックを受ける場面もあったそうです。スタッフも「LGBT」当事者が多いが、そうではない人もおり「同じと違い」が検討できそうだとのことを教えていただきました。

「わたしたちについて」

山根広太さん 八木智大さん NPO 法人ウィークタイ

ウィークタイのシンボルキャラクター「さめちゃん」をともなって登壇された山根さんは、宿泊もできる居場所、レスパイト目的の宿泊拠点、フリースクール等の運営など多岐にわたる団体の取り組みについてご共有されたうえで、当事者主体の居場所について、これまでに「支援者」「利用者」「当事者」を経験された立場でお話されました。自主事業のみで活動する当事者団体として「対等な関係性」「主体性の尊重」、運営時間や内容の自由度の高さを特徴として整理され、構成員が当事者意識や目的意識を強く持つことができ、企画立案の幅広さとやりやすさを感じていることをお伝えいただきました。資金面の困難さのほか、やりたいことを「インテリ層」のジェンダー男性を中心に集う場という傾向があるために、場になじめない人もいるということを課題として挙げられました。とよなかりレーションハウスの管理人

である八木さんには、ご自身のウィークタイに至るまでと現在についてお伝えいただきました。山根さんのお話と呼応するかたちで、「インテリ」であることは「アイデンティティとして外すことが難しい」ご自身の位置から「僕のやりたいこと」（＝「左翼文化系」に関わること）として、「中国語の勉強会」「東アジアの歴史」について話す会などを小規模に継続してうっていることをお伝えいただきました。「同じと違い」に関しては、ジェンダー男性メインの場に「女性をどう安全に受け入れていくか」については団体の中でも話題としてあがっているが、例えばセクシュアルマイノリティを含めた話には至っていないことや、「どれくらい掃除をするか」「布団を干さない」ために「干していない布団にしか眠ることができない」今について課題的にご共有いただきました。

意見交換、質疑応答

小グループに分かれての意見交換の後に、全体に向けてのシェアと質疑応答の時間を設けました。フロアからは、対象を限定する居場所にもしない居場所にもそれぞれの難しさがありそうだというお話や、構成員個々の違いを尊重したい気持ちがある一方で、同じ場を過ごすことができるようにルールも作らなければならない部分もあることについて言及がありました。このほか、対象を

限定した場づくりをしていると、もともと想定していた対象よりも、さらに対象が絞られてしまうような現象が起こりうるということも話されました。こうした意見に対して、対象を限定しているかどうかにかかわらず差異が際立ったり、属性に偏りがうまれることはあり得る、そういう場面があるとすれば、何故どのようにそういうことが起こるのかを検討することも大切なのではという応

答がされていました。以下では質疑応答について まとめます。

「初めて来られた方に安心してもらえるように心がけていることは？」

「こだわりが強いなあっていう方が居場所に来た時にどのように伝えればよいでしょうか？」

清水：私たちにとっては、「ただ遊びにくる利用者」も含めて（若者という）当事者かなと思っています。そう考えると、こちらから特別なアクションを起こさないときもあります。とはいえ、「スタッフと話すことで楽しみが広がるのでは」という思いもあるので、「とりあえず声をかけること」は大事にしています。その際、若者自身が発する情報（年齢や学校、趣味など）の内で、こちらが話せそうそうなことを選ぶことはします。そのほか、食プログラムに誘ってみて食べている間に喋ってみるなどもします。「何かこうしてほしい」という若者たちでないからこそ、かれらが関心をもちそうなことをこちらが散りばめておき、若者に選んでもらうというスタンスが大事だと思います。また、何か目的があったり、してほしいことがある人には、個人的には、まずはスタッフと話をしてほしいなと思っています。ただ、いつでも話ができるわけではないので、出来る形を提案して、最初の段階でこの場の使い方をお互いに擦り合わせができてると、当人にとっても使い勝手が良いのかなと思います。

内藤：受付の段階ではじめてだと思ったら、「ゲームせえへん？」って声をかけてみます。せえへんと言われたら、馴染むまで様子をみます。「ぼっち」対応のスタッフもいます。はじめての人だ

**「多様性を認めるという文言が私の認める多様性に限られていませんか？
と問われたらどう応答しますか」（内藤さんへ）**

内藤：「にじーず」は、参加対象にQ（クエスチョナー、クイア）を含んでいません。私たちもどこまでが当事者か分からなくなってしまうからです。これはすみ分けの問題ではあり、Qを含んでいる場もあり、LGBT以外の人が入れる場もある。「にじーず」は、その中で当事者の集まりとして安心を持つために限定をかけている。

と、一人でいたいのか、慣れるまで緊張しているのか分からないので割りと声をかけたりします。こだわりが強い子に関しては、「にじーず」には出来ることと出来ないことがあるので本人に確認することが大事だなと思っています。参加していく中で実は聴覚過敏があってと言ってもらえたら席の配置考えようとか提案ができる。ただし、そういうことは初めてのときには言わない。初めての時に受付でいってくれていれば対応できるが、長い時間がかかる。言ってもいいなと思ってもらえて話してもらえるのだと思うが、もう少し早く関係性を築ければこちらでも対応をもっと考えることができるなと思う。

八木：障害とか引きこもりの当事者性のある方もおられますが、一様ではない。自分からはなかなか声を出すことができない方もおられる。僕と同じぐらい喋る人だったら、僕が支援的にふるまう必要はない。（支援者としては）素人で危ない線もわたりながらやっています。飲酒もするし、ジェンダー的にどうかな？という発言に対応したりもしています。

山根：当事者団体なので支援ができないということはお伝えしています。障害特性として、こだわりが強い方とはおられますが、すべてを受け入れることが双方にとってよくないときがあるので、お断りをすることもあります。

「自分の認める多様性しか認めていない」と言われればそういう側面はあると思う。ただ、本当に誰でも参加できる場であれば、僕が許容できない性質をもった人がいた場合に、僕はそれを受け入れるしかなくなる。その場がどういう場であるかということに関わるので、場にあった多様性を選んでいるということになる。

「生きづらさを抱えた男性が安心して生きられるような場づくりをしていくことも考えられるのではないのでしょうか」

山根：アイデンティティを譲るつもりはありません。公共事業ではなく、非営利活動なので変えるつもりはないのだが、事業継続ってなると現実的な問題があります。

八木：インテリ男性は特権性のある立場であるのでそこに居直ることに問題もあるなと思っています。

**「『普通』の若者との対応や、ロビーワーク上気を付けていること大事にしていること」
「ユースワーカーであり施設管理者であるジレンマについて教えてください」（清水さんへ）**

清水：私がいま一番大事にしているのは、「37歳。男性。スタッフとしてみられている」ことを自覚するということです。それは、若者にとって、行動を抑圧する存在としてみられるかもしれないことをしっかり分かっていないと利用者に対して失礼だと思っているからです。また、気を付けている事として、相対する若者の年齢によって、最初の話し方を変えています。大学生年代以上の人にフランクに話しかけるのは、人によっては失礼に感じるかもしれません。一方で中高生年代には、話しやすさを考えてフランクさを意識してやっています。とはいっても適切な距離感は保ちたいので、手を回したりハイタッチしたりといった身体接触はしませんし、若者にもしてほしくないと言います。それは、先ほども言った通り「スタッフ」として見られているため、身体的な距離が近いこ

とが不快だと感じてても、若者は「施設が使いにくくなったらどうしよう」とか思い、断れないかもしれないからです。だからこそ、自分の立場を自覚し、距離感をしっかりとろうと思っていますし、こちらもとってもらえるように伝えます。自分の立場を自分なりに理解しながら、誠実に切り分けて対応しているつもりです。また、施設内の物を破損させたり、スタッフに暴言を吐く利用者に対して、ワーカーの心情としては「居場所を求める若者」として対応した方がよい時もありますが、管理者視点としては、その行為が他の若者含む周囲にどのような影響を及ぼしているかも考えて対応しなければならないとも思っています。管理者としては注意ばかりしているようにみえてしまうかもしれませんが、その場をどう守るかも考える必要があります、悩みながら関わっています。

「家族×支援×若者・ひきこもり×協同実践＝〇〇」

執筆者：安倉 晃平

若者やひきこもり当事者が問題を抱えているとき、若者やひきこもり当事者と家族の間に激しい葛藤が生じたり、問題に直面することを避け、解決を先送りしてしまうことも多い。また、支援者は相談に来た家族に知らず知らず問題解決を求めがちになることもある。しかし、こうした問題は、本当に家族の力だけで解決しなければならないものなのか。

この分科会では、家族、支援者、若者・ひきこもり当事者など、それぞれの立場から何を思うのか、そして共に何ができるのかを協同実践という観点から考える。それぞれの立場で感じるズレや違和感にも気を留めながら、一緒にその「問題」に取り組むような、参加者それぞれが「協同実践」を見つけられる分科会を目指した。

コーディネーター

竹端 寛	兵庫県立大学	兵庫
安倉 晃平	泉南市	大阪
持明院 由子	公益財団法人京都市ユースサービス協会	京都
佐藤 剛	お手伝い	大阪

実践報告

田上 貢	龍谷大学大学院文学研究科臨床心理学専攻研究生	京都
藤原 典子	家族支援ネット♪らるご♪	京都
平井 登威	NPO 法人 CoCoTELI	大阪

1 実践報告の概要

(1)【実践報告①】田上 貢氏（龍谷大学大学院文学研究科臨床心理学専攻研究生）

報告タイトル：「ひきこもりと家族 ～支援者の立場から～」

ひきこもりの原因や背景は、その当事者によって様々であり、そもそものきっかけが分からない人もいるため、その多様な背景を踏まえたうえでの支援が必要である。また、個人は独立して存在しているのではなく、国、地域、家族という「集団内の個」として、様々な影響を受けているという、システム論の考えで「困っている本人や家族の困りごとの解決」を目指している。

家族の問題として捉えるときに、本人、母親、

父親の意向が異なることも多く、支援者が誰の意見を尊重するかで、膠着状態が続いているように見えてしまう。どちらかに偏る支援ではなく、お互いに近づいていけるような話し合い、折り合い、妥協点の見つけ方、コミュニケーションの変化、相互影響の変化を試みる必要があると考える。支援者も協同実践という観点で関係性の変革を目指すことで、家族関係の改善が期待できる。

(2)【実践報告②】藤原 典子氏（家族支援ネット♪らるご♪）

報告タイトル：「立ち止まった若者、家族とともに 家族支援ネット♪らるご♪」

20年以上不登校親の会に携わってきたが、2022年からひきこもり支援の団体「家族支援ネット♪らるご♪」を立ち上げ、家族支援や本人支援を行っている。不登校支援後、学校に行けるなどして解決できたと思えても、また悩み、立ち止まっている当事者やその家族に数多く出会って

きたため、不登校よりも少し上の世代、ひきこもり世代の支援をすることになった。

支援していくなかで、不登校支援とひきこもり支援の違いも感じている。例えば、学校復帰や進学を目指すことの多い不登校支援に対して、ひきこもり支援は次の一歩やゴールの選択肢が無限に

あることや、ひきこもりの支援では、進級の区切りがなく一見平穏であるが、親も本人も動き出すきっかけを見いだせず、社会への恐怖感、抵抗感が大きくなることなど。

「家族支援ネット♪らるご♪」では、家族からの相談を受け、その家族の状態に応じて方法を変え、個人の支援へと繋げていっている。一歩繋がるまでの苦労を共に揺れ、労い、共に考え、家族を支え続けることを念頭に支援している。

支援現場としては、スタッフ全員の専門領域や支援観が違い、支援方針を決定するときに、時間と労力と知恵が必要。グループ支援に際し、①細かなコミュニケーション、②顔を合わせて話し合

う、③理解し合う（オープンマインド）、④お互いへのリスペクト、⑤当事者ファースト、を大切にしている。

スタッフ間の支援観の違いについては、担当者が主に支援しながら、役割分担は明確にしている。揺れ、苦しみを抱えるピアの専門性も慎重に考えている。

本人や家族が仮の安定に安堵し、状況が膠着してしまうときがある。そうしたときにも、ひきこもり状態に至るまでの家族の歴史を尊重しつつ、スタッフ間の適切な役割分担のもと、家族として本人にどのようなアプローチができるか、家族と相談し、選択肢を伝えながらアドバイスしている。

(3)【実践報告③】 平井 登威氏 (NPO 法人 CoCoTELI)

報告タイトル：「CoCoTELI」

「CoCoTELI」は、精神疾患の親をもつ子ども・若者支援として、コロナ禍に学生団体として立ち上げ、自身も当事者として活動を開始。2024年5月NPO法人化した。

精神疾患の親をもつ子ども・若者について、他の子ども・若者と比べて精神疾患罹患率が高く、心身の健康や社会生活上の支障が出る可能性が高いが、家族主義が強く公的支援がほとんどない。また、「ヤングケアラー」や「不登校」などのラベルがつかず、名前のつかない日常的な難しさもあり、予防的支援がないため、負の連鎖から社会的に弱い立場に陥りやすい。

支援者主導ではなく、当事者とともに考える。些細と思える相談事でも、一緒に頭を悩ませる相手に選んでもらえるようにということを大切に活動している。

最初に相談をしてくるタイミングは、既に様々な影響が出ている状況でもある。SOSを出され

る前に、事前予防型に変えていきたい。実際に悩みを抱える子どもたちが見えづらい現状がある。

家族の誰かに問題があって支援者と繋がっていても、個人の問題と捉えられて、家族支援まで始まらない。その困難から派生する困難の可能性に目を向けていく必要がある。

主な活動としては、住む地域を限定しないオンライン上で、相談しづらい悩みを表出してもらえ場所を作り、支援している。個別相談では、1対1の相談のみならず、ピアスタッフと専門職との三者で相談支援を実施している。ピアでも専門職でも、それぞれに可能性と限界があり、お互いに補い合える。他方を尊重しながら、リフレクティングをし合うことも大切だと考えている。

協同実践の考え方についていけない専門職との協同についても、できる範囲で段階的に進めていくなかで、選択肢は増やしていき、より協同的な実践に発展していくことを待つ。

2 OST（オープンスペーステクノロジー）による意見交換

(1) テーマ選定

参加者から、話したいテーマを紙に書いてもらい、全体に発表。話したいテーマを各自選び、3名以上集まったら成立として、4つのグループに分かれた。(オンラインは別)

(2) テーマ別意見交換

【テーマ① ピアの危険性、ピアの立場】セルフヘルプグループにいても、相談を受ける立場になりやすい。複数の属性を持っていることを整理する、セルフヘルプグループとピアサポートの違いについて意見共有。

【テーマ② 第三者的な地域として何ができる

か】 ひきこもりの方が外に出たときの繋がる先、また繋がれるのかという悩み。不登校支援者や不登校当事者のそれぞれの経験。様々な支援方法を知っていることの重要性などの共有。

【テーマ③ 年代によって変わるひきこもり当事者の気持ち】 ひきこもりになった理由、社会に出るきっかけも様々。社会復帰を考えられる年齢と社会復帰が難しい年齢それぞれの気持ちや、安心して生活できる環境を社会全体で作っていくことができるかなど。

【テーマ④ 家族と本人の対立構造を作らない方法】 精神疾患の親をもつ子ども・若者とその

親、ひきこもりの子どもとその親など、権利のコンフリクトが起きうる場面で、ミクロレベルとマクロレベルの二つの視点で対立構造を作らないためにできることについて話し合った。

〔オンライン ピアの危険性、家族と本人の対立構造を作らない方法〕 ピアサポートによって

うまくいくこともあれば、ピアの立場を支援者側の自己実現の道具に使うことで当事者が傷つくこともある。対立構造があるなかでの対処は考えられ、経験談も共有されているが、事前に作らない予防的な支援ができるのか、どのようにそれができるのかとの問い。

3 フィッシュボウル形式による意見共有（ファシリテーター：竹端 寛氏）

〔参加者1〕7040問題。福祉制度を提案しても、親自身もモヤモヤしている。モヤモヤの原因になり得ている昭和的マインドセットはまだ多い。夫婦の意見が一致せず、親の問題であることが多い。

〔参加者2〕家族会をやっていて、何も解決せずして来なくなった方もいる。7040問題の、シニアケアラーの「シニア」に焦点を当て、老いをめぐる親側のつらさに支援する必要もある。この年代だからこそ、経済面の逼迫状況を支援者に言えないという人も多いのではないかな。

〔参加者3〕立場・考え方が違う者同士の協同の問題。自分の立場をうまく使い分けることができずにつらくなることも。「一緒に」とも思うが、

違いを軽視するとこじれることもある。対立が表面化して初めて気づかされることもある。折り合い、妥協も必要。折れない人ほど「認めてほしい」という思いの表れでもある。声の大きい人に流されず、小さな声を受け止める意識を持てるようにしたい。

〔参加者4〕どうやったら優しい人が生きやすくなるのか。まちづくりに携わるなかで、同じ立場の人ばかりが同じことを言っているからうまくいかないと感じることがある。地域の役職の人にも歴史があり、変革には時間がかかる。声なき声を大事にし、役職のない人の意見を聴くことの必要性をしっかりと意識していきたい。

〔登壇者からのまとめ〕

田上氏：JYCフォーラムで起きている対応が協同的。皆対応上のマナーを持って話していると思う。第三者に入ってほしくない家族に対しては、話しやすいテーマにずらしてくれる存在がいると良い。役割上の演技に捉われず、共に対話することが大事。

藤原氏：声を聞くのは難しい。本音は奥の奥にある。家族と同居、別居など、同じ生活文化圏にいるかどうかで、キャッチの方法も違う。その

人に興味を持つこともキャッチする入口にできる。

平井氏：対話的になることが難しいとき、翻訳者（すり合わせる人）が必要。自分が持っているバイアスに自覚的でありたい。無意識の暴力性、ラベルに気をつけたい。そこまでラベルに意識が向いてしまうのは、これまでも今もラベルで見られることが多いから。

4 まとめと今後の課題

若者・ひきこもりの問題を、個人や家族の問題として捉えるだけでなく、個々人も家族も、それぞれが生きる地域や社会のシステムのなかで影響し合っていることを考え、家族内の問題やその家族が生きてきた社会の問題などに焦点を当てなおす試みは、支援者にも、本人・家族にも、そして、医療・福祉専門職にも必要である。皆が同じ考えではないなかで、どのように協同的関係性をつくり出し、協同実践を展開していくか。関係する一人ひとりが自身の立場を自覚しながら協同実践を目指すためには、対話を重ねていくことは不可欠であろう。それが、ひきこもりや若者の問題とされることや、家族が抱え込まされている問題、そ

してそれらを生み出す社会の問題を解決する糸口になると考える。

家族に関する分科会でありつつも、家族の問題に終始するような分科会とならないよう心がけるなかで、協同実践や協同的関係性について、家族も含め、様々な立場から議論することができた。本分科会は、「家族×支援者×若者・ひきこもり×協同実践＝〇〇」というテーマ設定のもと議論をしてきたが、参加者それぞれが考えた「〇〇」の中身がどのようなものであったのか。今回の分科会では、統一的な結論を出すことは控えたが、今後はさらにそれぞれの立場から考える「〇〇」の中身について、さらに議論を深めていく必要がある。

自助・対話・つながり それから一当事者活動を知る・考える

まとめ：丸山 康彦

今大会では「ひきこもり」というカテゴリーを超え、関西で若者を中心とした当事者活動に取り組む3つのグループが登壇します。居場所やセルフヘルプなどそれぞれの活動を掘り下げ、当事者活動の意味を考えます。

コーディネーター

丸山 康彦

ヒューマンスタジオ

神奈川

実践報告（順不同）

でがらし

Break

大阪／奈良

ちっちゃな、ひきこもりの自助会
<https://www.break.nara.jp/>

よだか
もりもと

wish you were here
wish you were here

大阪／奈良 ほか
大阪／奈良 ほか

大切な人—家族、恋人、友人、好きな芸能人—を
自死によって亡くした人たちが出会い、
お互いの体験を分かち合い、
一緒に生きのびていくための活動
<https://lit.link/wishyouwerehere>

おまけ

SHSH

大阪

自傷行為、アディクション経験者の
セルフヘルプ・グループ、自助グループ
<https://shshwith.themedia.jp/>

第1部 当事者会の紹介（カッコは活動テーマ）

Break（ひきこもり）

英語のBreakには「休む」「突破する」という両方の意味がある。Breakも両方を兼ね備えた集まりにしたい。突破するにはタメが必要。息抜き、仕事、講座、運動などの企画でタメを作ってもらえればと思う。他の団体と協働することで回数やバリエーションを増やしている。

対象は、ひきこもりライト層（伴走者が不要、常識的な言動をしていただける方）に限定。枠を作ることによってニーズに応えやすいと考える。成果やゴールをどこに置くかは参加者自身が決めること。一方、世話人の役割は参加者の可能性を広げることにあると考える。意思決定や作業のあり

方は、世話人が参加者の意見を吸い上げながらもトップダウン。手伝ってほしいと思ったら得意な誰かに頼む、相談に乗ってもらう。世話人は常にオーバーワークで、ちゃんとやれば参加者の可能性をもっと広げられるはずが、構想通りいかずたいへん申し訳ないと考えている。

※ Breakの当日使用スライドはこちらから閲覧できる（2025/3/24）。

スライド：協同実践交流会／分科会 自助・対話・つながり それから（2024/12/21）- Break

<https://www.break.nara.jp/entry/2024/12/22/060153>

SHSH（自傷）

SHSHは2019年8月に活動を開始した、自傷、アディクション経験者のセルフヘルプ・グループ（以下、SHG）である。当初から①会場ミーティング（2020年以降、ほぼオンライン併用）を始め、2020年12月以降②深夜ミーティング（オンラ

インのみ）を開始した。現在この2つが主な活動で、自傷者本人の経験を分かち合う場をつくるとともに、資料を用いてSHG、自傷、アディクション、他者との関わり方などについて知る・考える機会ともしている。ミーティングの日時・会場・

オンライン時のアプリが一定でないことが特徴の一つ。そのため主にHPやSNSを通じて告知・報告を行っている。

報告者自身の生き方の問題への取り組みとSHG経験を話し、その中でアディクション、依存症分野のSHGにおいて代表的な潮流であるアノニマスグループ／12ステップグループについて

wish you were here (自死遺族)

wish you were here はよだかともりもとから活動紹介をした。大切な人を自死で亡くした人たちがSNSなどを通して出会い、オンラインや、ときに対面でおしゃべりをしたり、たわいもない話も含めて不定期のカジュアルな交流を続けながらともに生きのびていく活動。よだかもりもとも、母を自死で亡くす経験をしている。自死の話がタブー視されていて人にしんどさを話せなかったことによる生きづらさがこの活動に繋がっている。

第2部 パネルトーク (抄)

コーディネーター：丸山康彦 (まる)

パネラー：B＝でがらし (Break)、S＝おまけ (SHSH)、wも＝もりもと・wよ＝よだか (wish you were here)

まる (Break について)：当事者会ってルールがある。横浜で「ひき桜」の運営メンバーをやっているルールを決めていて思うが、安心・安全のため？

B：そうですね。安心・安全でないと来られない。Breakのルール上「常識の範囲でお願いします」と参加者に言いますが、出来ない、合わない人もいる。考えてみれば無理に合わせる必要はない。他もあるので。始めたころはそれでもけっこう我慢してた。なるだけ受け入れようとして。しかし、僕が我慢するってことは、他の人も我慢するってこと。それでいいのか。誰にとっての安心・安全か線引きは重要。

まる (SHSH について)：「自傷の当事者交流が」賛否両論ある」というところ。

S：複雑。「伝染する」という現象自体を否定するつもりはないが、それでじゃあばらばらでよくなるのか。アディクションは「孤立の病」と言われ、「アディクションの反対はコネクション」と言われている。自傷をアディクションだと考えるならば、必ず悪化し、やがては死に至る。

まる (wish you were here について)：「自死遺

族」って配偶者を喪った方、お子さんを喪った方を想像する。「介護」って中年のご夫婦が高齢のご両親を介護するイメージだったのが「ヤングケアラー」が知られてきたのと似ていると思う。もりもとさんが「自死について話せる社会がいい」って言ったが、いろんなジャンルでなかなか言いにくい。ご自分の立場からほかの問題に対しても同じように、自分たちと通じることがあると思うか。

具体的な活動としては、繋がった人とのLINEやZoomでのやりとりや、互いが希望すればそれぞれの旅行のタイミングで直接会うこともある。定期的な会は開いていない一方、stand.fmで自分たちの話を配信したり、ゲストを呼んだりすることで、人と話をしたい人や、まだ話すのはしんどいけど似た経験をした人の語りを聞きたい人、自分は遺族や当事者ではないけど気になっている人など、様々な層との接点を持っている。活動に関するnoteでの発信もしている。

wも：タブー視されすぎているのが問題か。話してる人の声がアクセスすれば聞こえるとか自死遺族会もあるけど知らない人も多いとか、隠れすぎているとしんどいなと思う。ひきこもり、自傷経験の人の対話も、音声配信がいいのかはわからないけど、つながろうと思ったらずながれるようになればいいと思う。

まる：何かお互いにありますか。

wよ：wish-は趣味の延長でやっている。仕事しながらやっている活動、キャパがない。経済的にも体力的にも。さっきB・S二人は24時間寝ずに活動されてるって、持続可能性は。わたしたちは2人でやってて人を集める気もないけど、運営の大変さとかあれば。

S：一人でできる範囲でやろうとは決めている。自分が人を巻き込むのが下手だから。そのほうが広がりとか継続性を担保できるんでしょうが。成長すればそうなるかもしれんけど、当面はそ

うじゃない。深夜のミーティングも「しんどくないの?」とか素朴に聞かれるんですけど、わたし今固定で夜勤なんで、夜起きてるほうが普通なんです。むしろこうやって昼間動いてるほうが寝る時間ずらして調整してる。

B: ときどき Break に「自助会やりたいです」と相談に来られる人がいる。中には Break のような形を想像されている。そこで最初に、6年経って今の形だということを言います。最初ももっと小さかったのだと。次に、自分は苦手なことはやってないと。HP は始める前から作れた、SNS もやってた、リーダー的なことも小学校からやってた。Break を始めるにあたって特別な努力はしてない。しなくてもやれることを集めてるだけ。だから「これは僕のパターンです。それぞれ強みは違う。でも、ぜったい何かある」と言って、ご自分の持ってる特技や経験や背景を合わせて、現実的にどうやるかを考えてもらいます。つまり、自助会って、作った人自身や世話人自身が反映される。やるならその人にとって楽なことをしないと続かない。しんどくはあるが、苦手なことをしてるしんどさはない。

S: 最初、wish- の2人に「ぜったい怒られる」と思いながら連絡しました。

w よ: おまけさんが連絡くれる前に SNS でフォローしてくれて、この人うちの活動に興味あるんやったらラジオに出てほしいなぐらい勝手に思ってて。自殺と自傷って意味合いが違いますよね。自傷行為してる「命大切にしろよ」みたいな感じで説教されるけど、苦しみとか痛みから逃げるために、生きるためにやってはるってところだし、また自殺とは違うよなと思ってて、それをおまけさんの活動みて思った。そこも世の中的に誤解されてると日頃思ってる。「死にたい」という人も説教される中で、ぜんぜん真逆の活動だとはわたしは思わなくて、むしろ近いものは感じていた。「死にたい」とか「自傷してる」と言えないからタブー視される苦しさを地続きやと思う。

w も: なんで怒られると思っていたのかわからない。

S: そうじゃない人もいるけど、「自傷の人は」死にたい人もすごく多いから。

w も: 死んでほしくなかったっていう気持ちはもちろんあるけど、死にたい気持ちを責めるわけではない。

B: 僕は Break の活動について意味をよく考える。立てた目的や目標に意味があるのかどうか。ひ

と一つ、なぜそうしてるのか、なぜそれが必要なのか、なぜこういう現在の形なのか。すべてつながっているんだけど。目的や目標にそってるのか。皆さんは、それぞれご自分の活動について、どういう意味や意義があるのか、どう考えてますか。

S: わたしはあまり意味は考えていない。このようにやっていることの影響とか効果はたまには考える。たとえば「自傷」の定義をこんなふうに爆広げしているのは、きっちり定義して研究しようとしている人からしたら、もしかしたらイラッとするかも知れないとか。

人数は増やそうとは思っていない。人来たらミーティングできて、人来なかったら一人で本読めて、どっちにしてもうちの勝ちやん。微々たる動きだけど、あちこちでやることで、どこでもできますよということを見せられたらいいなと思いつつやっている。

w も: やりたいからやってる感じ。僕らは趣味でやっているというか、仕事をしながらできる範囲でやっているの、連絡が殺到したらすぐパンクする。対話の活動、ラジオもそうだし、収録せずに Zoom で話す中で、僕自身がいろんな考え方に触れて一人で抱えてた。よだかさんと出会う前なんかはぐるぐる自分のせいで親が死んだんじゃないかって考えてたし、自殺っていうものに対するネガティブなイメージとかあったけど、いろんな人の語りを聞く中で僕自身が違う発想を持てるようになってケアされ、癒されていく。対話を通じて「話してよかったです」って感想をもらえたり「気づき、考えが前に進んだ」みたいな言葉をリスナーやゲストの人からもらえたときにやってよかったと思う。音声配信に関してはいろんな関わり方がある。リスナーで聞いたりとかゲストに出たり。今年、家族を亡くした人が「声を聞いてちょっと楽になりました」って言うてくれたり、いろんな接点を持ってもらうことができてるのでやってよかったと思う。

w よ: わたしもおまけさんが言ってた感覚に近い。意味は特に考えてないけど、もりもとくんが言ったように、結果的に活動を通じて出会った人が意味を感じてくれた。連絡する人がいっぱいいてほしいというよりは、こういう音声配信があることを知ってくれる人が増えてほしいと思う。連絡をどんどんしてくださいというほうに力を入れるというよりは、note とか、連載（『大切な人の自死とグリーフをめぐる語り合い』創元

社 note 部 <https://note.com/sogensha/m/mac7c7612393c> } を始めたのもそうで、そっちのほうが入力している。自死で大切な人を亡くした人たちって、話すこと自体にハードルがある人も多い、話すことで否定されて傷ついてきた経験を持ってる人たちも多いと思うので、必ずしもわたしたちにコンタクトを取ってくれるってことが意味あることだとはわたしはあまり思っていないくて、それぞれの受け入れていくペースがあるし、自死の痛みを乗り越えなくてもいいと思ってるし。音声配信があることを知っていることがその人の、前に連絡くれた人は「聞くだけで居場所になっていると感じた」と言っ

第3部 グループトーク（まとめ）

Break のグループ

参加者は、ひきこもり当事者・経験者（被災避難者でひきこもりになってしまった人も）から、支援者まで。

この分科会の目的は「居場所やセルフヘルプなどそれぞれの活動を掘り下げ、当事者活動の意味を考える」だったが、私の技量不足で、それに見合うような話にもっていくことが出来ず。

3グループの比較や個々の発言を掘り下げするような方向性を想定していたが、最初にそう言わず、思ったことを何でもどうぞという風に言ってしまったことが原因。

Break のプレゼンの続きをしているかんじがした。

それぞれがかかわった（かかわっている）当事者グループや支援組織について述べてくださった方もいらした。

SHSH のグループ

- ・当事者はいなくて、自傷やアディクションの人の周囲にいる人や、友人づてで聞きに来てくれた人だった印象（でも人数は期待以上だった）
- ・じっくり会話でき、前から一方的に話すより、興味を持って聞いてくれていることが実感でき、

てくれた人がいて、そういう場所であるならば、別にこちらにコンタクトがなくても、「聞くだけで居場所って感じられる場所」があるならその人にとって意味あることなのかなと思っていました。

B: なるほど。ところで、おまけさんの「どこでもできますよということを見せられたら」には同感。Break はフードコードでやることがある。お手軽。自助会、やる人を増やしたい。増えればバリエーションが増える。そうだ、あんまり「しんどい」って言ったらあかん。もっと「楽しんでやってます」「できなくても平気よ」って言わなあかん（笑）

感謝。SHG では自主・自立運営しながら外部とも「提携はせず協力する」。次の協同実践に展開させる、つなげるにあたって、参加者とじっくり話せる時間があるのはプラスだったかと思う。

- ・空気を読んでくれたのか？人数うまく分散したが、途中で移動したい（別団体の話も聞きたい）人いなかったのかな
- ・地域性が反映されている部分もある大会だったが、周辺地域の活動に報告してもらわなかったのは残念だった。気が回らなかったごめん
- ・オンライン参加の位置づけを分科会内でもっと明確にしておき、HP や資料集に明示できるとよかったか。

（聞くだけ／コメント・質問の可否、扱い／会場と同様にグループワーク等も参加など）

wish you were here のグループ

参加者の方から、自死でたくさんの方が亡くなっている事実は知っていたし気になっていたが、遺された人が大変だということに思いをはせたことがあまりなかったという意見があり、その方の身近にいる精神疾患をかかえた人の話や、その支援の話なども交えながら、ざっくばらんにいろいろな話をしていました。

まどい分科会：喫茶まどい

執筆者：福村 幸子・南出 吉祥

人はだれしも多面的な存在ですが、最近のあなたは「当事者」「家族」「支援者」「研究者」「行政関係者」「市民」など、どんな役回りや要素が多いでしょうか？

また、その役回り以前に一人の人間として揺れたり戸惑ったり違和感を覚えていることはありますか？

また、何かと何かのあいだで、問いを抱え、考えていることなどはありますか？

この分科会では、対等な一人間として円く居並び（円居）ながら自らの「惑い」をまず言語化し合います。ふだん立場を異にする者どうしがたがいの惑いや問いを通して「出会い」、共有することで、自らの問いを深めるヒントを得たり、つながりをつくり、新しい何かが始まっていく——。そんな寄り場をつくります。

福村幸子

一般社団法人キャリアブリッジ

大阪

南出吉祥 JYC フォーラム・岐阜大学・仕事工房ポポロ・教育科学研究会

岐阜

■なぜこの分科会を企画したのか？（福村）

かつて参加した困窮者支援の全国大会では登壇者は政治家や研究者が中心で、最前線で日々奮闘する支援労働者が現場で考えていることを自由に語り合う分科会は用意されておらず、疑問に感じていた。今後もし何か企画する機会があれば、ど

んなかたちであれ、参加した誰でもが対等な主人公として自由に語り合える分科会と「席」を用意したいと思っていた。そんな経験から「まどい」をテーマに、ゆるやかな分科会を企画することにした。

■前夜のたじろぎ（福村）

『「まどい分科会～喫茶まどい」？ 何する分科会なんか一番ようわからんなー！』。

開催前夜の準備作業中、前の席に座っていた10代の子たちがそう喋っているのを真後ろで聞いたときは、一瞬ほんまに明日どうなるかわからんなぁと内心たじろいだ。なぜなら、「人間が生きるうえで、まどっていること」と、参加した誰

もが対等な主人公として語る場にすることだけは一貫していたが、必要最低限の枠やルール以外、ほぼ考えなかったからだ（この分科会が「若者」や「ひきこもり」という人生の一時期を区切ったフォーラムの一環という位置づけだったことすらも）。

■空席がなければ喫茶店には入れない（福村）

当日は空席（座布団）を14席用意して来客を待った。コーディネーター2名を含め20～70代くらいの14名が地下室の「喫茶まどい」に「来店」した。支援（労働）者、学校に行っていた人や行っていなかった人、ひきこもり経験がある人やない人、病気や障害がある人やない人、研究者、休職中、親、何かと何かの間にいる人など、さまざまな立場の人たちだった。思い思いにいま自分が「まどっていること」を話し、他者のまどいも聴いていった。当初は前半と後半にわけ、前半で各自のまどいをタイマーで計りながら順番に話していき、後半はテーマ別に分かれて話す予定だった。しかし、いざ始まってみると、順番に「まど

い」を話していくという前半戦のみで終わった。なぜなら、コーディネーター2名がそれぞれ自分の話をしたあとで、参加者が順番に話し出すや否や、まるでステージに放たれた身体と感情をもつ「まどい」のどれもこれもが、ふさわしい言葉を探す間（ま）の取り方、強弱、言いよどみを含めて、全員の語りが名ゼリフのように聞こえて圧倒され、それを電子音のタイマーで邪魔することなど、とてもじゃないができなかったからだ。順番が回ってきた真ん中あたりに座っていた参加者が「ここらで休憩でもしませんか？」と提案してくれるまで、休憩を入れるのを忘れていたほどだった。

■うっとりは何だったのか？（福村）

ドラマトゥルギーに寄せて言えば、当初のイメージは、地下の「喫茶まどゐ」は舞台裏みたいところで、そこは「ゼロ・シチュエーション」（筋を展開するために設定されたものが何もない状況）。たどりついた主人公は、スポットライトが自分に回ってくれば、自由に今考えていることを語りだすというものだった。

「喫茶まどゐ」には、いくつかの要素があったように思う。

まずは社会的役割から解放されること。各自どう名乗るのかは自由で、言っぱなし聞きっぱなしで口外しないというルールを設けたことによって、本来「多面性」を持つ自分自身が、最近多めに担っている社会的役割に伴う期待と演技に対する距離も自由に語ってもよい舞台裏（裏局域）の空間であろうとしていた。

語られた「まどい」の1つひとつは、その人の「過去と未来の間」あるいは「自分と自分のなかに存在する他者／外界との間」で、現在の自分が、何を、なぜ、どのように感じたり考えたりして今生きているのかを、言葉を探しながら語ろうとするもののように感じられた。各人のそれを聴くことは、ほんとうに面白く、この分科会の醍醐味だった。

自分のまどいについて語り、それを解釈していくなかで世界を認識していくのだとすれば、そのような自己言及性ある他者のまどいをライブで聴くということは、その他者が今まさに世界を認識するベクトルへ向けて試行錯誤する瞬間に立ち会うようなもので、その緊張感を共有している感があった。それが次々と続く「舞台」のようだった。

＜参考資料＞ ミハエル・バフチン『ドストエフスキーの創作の問題』（平凡社 2013年）

■実践交流会における「語り合い」の場（南出）

本大会のスローガンとして掲げた「交歓する日常と非日常一つくる・まどう・生きる」という表題に即して設定されたのが、この「まどい分科会」である。日々の日常生活において、人びとはさまざまな社会的属性を背負いながら生きている。この大会参加者に絞ってみても、「支援者」「当事者」「家族」「研究者」「行政関係者」などなど、多様な属性を帯びた人びとが集まっている。それぞれの属性ごとに、社会や周囲の他者からの役割期待が課せられ、そこに「自分らしさ」を感じて生きがいを持てる人もいる一方、その期待の重圧に耐えかね苦しくなっている人もいる。しかし、社会全体のゆとりや余白を奪われた生活現実のさなか

「まどいの渦中を生きている他者」どうしが、現在進行形でまどい考えていることをたがいに聴き合うことで、立場は違えど「同じ人間」という地平へと還ってくる場となった。

まどゐでは、「言っぱなし、聴きっぱなし」だったのでほとんど一歩通行で応答や対話はしていなかった。人の話を聴く基本的な姿勢として、例えばカール・ロジャーズの共感のように、他者の世界を内側から見たように正確に理解することや他者の世界を自分のものであるかのように感じ取ることが求められたりする。しかし、ミハイル・バフチンなどは逆に共感や他者との融合などではなく「理解にとってきわめて重要なのは…く外部に位置している」ことである」と言い、「他者の文化にたいして、それ自身ではみずから提起しなかったような新たな問いを提起」することだと言う。もし次回があれば、対話の場をつくりたい。

終えて1か月半が過ぎ、喫茶まどゐには不思議な「うっとり」感が流れていて、それが何だったのかを考えていたら、正直これまであまりピンとこなかった日常業務の根拠法の理念の1つである「尊厳の確保」へとなぜかつながった。各個人のなかにこそ「自立しており融合していない複数の声」があり、それらの間で人はこれまで思考して生きてきたのだとしたら、喫茶まどゐではそれが現前化した14名分の「存在と時間」には愛おしさのようなものが満ちていたように思う。それはまるで暖炉のようにあたたかなものだった。もしかして、「尊厳を確保すること」とはそういうことなのかもしれない。

では、その苦しさを吐き出せる機会・場を持つことは容易ではなく、「役割を果たせない自分はダメだ／こんなことでクヨクヨしている自分なんて…」と、自己を責めてやり過ごさざるを得ない状況が広がっている。

そうした「役割期待」の重圧を逃れていくための方途として、同じ属性の者同士で集まり、「口外禁止、議論禁止」などのルールを定めたうえで、愚痴や戸惑いを吐き出せる場をつくっていく取り組みがさまざまな領域で展開されている。依存症当事者や障害者、性的マイノリティなど、いわゆる「当事者」と名指される人びとのあいだで広まっている取り組みだが、家族会で展開されているこ

ともあるし、さらに近年では、「支援の当事者研究会」といった取り組みが始められたりもしている。

2003年からスタートしたこの実践交流会は、当初「社会的ひきこもり支援者全国実践交流会」とされており、「支援者」ということをタイトルにも掲げてきた。この交流会を立ちあげたねらいの一つに、「相談業務などで、当事者や家族の話は日々たくさん聴いている一方、支援者自身が自分のことを語れる場がない」というものがあった。支援を行うなかで生じてくる不安や戸惑い、しんどさの吐露は、今まさに苦境の渦中にあり苦しんでいる当事者・家族の前ではなかなか表にすることができず、職員同士でも「支援技量の高低」として意識されてしまうため、抱え込みがちになり潰れていく、という状況を乗り越えていく必要がある、という問題意識であった。

そうした経緯もあり、あえて「支援者」と括ることで「支援者が安心して語れる場」を設定したのだが、実際には「元当事者・家族であり現在は支援者になっている者」とか、「支援者として活動していたものの、バーンアウトして今は当事者になっている者」「ピアサポート活動を展開している者」など、表層的な属性だけでは括れない人たちも増えていくなかで、いわゆる「当事者」や家族、行政関係者なども含め、多様な人びとが大会づくりに主体的にかかわってくれるようになっていった。

さらに、「支援」という語にまつわる権力性・暴力性への批判意識が自覚化されていくようにな

■まとめ（南出）

「実践交流会」といった場合、どうしても「実践」が主題になるのは自然な流れであり、そこに対する参加者のニーズが高いことはその通りであるが、同時に「実践をするわたし」（「日々生きること」それ自体が実践である、という含意も含め）に焦点を当てた語り合いに対するニーズも、やはり相応に高いことがあらためて確認できたように思う。特にコロナ禍以降、大会全体の参加者に占める懇親会参加者の割合の高さが際立っているが（2023・2024年の二年連続で3分の1が参加）、

るとともに、いわゆる「支援」ではない形で若者たちにかかわる実践も増えていくなかで、「支援者」という語は外して「協同実践」を打ち出していくことになり、「立場や属性を超える」ことの重要性が意識されるようになっていった。そのころから、あえて「当事者」「家族」と括るのではなく、「協同実践を進める人びと」という共通項を据えて大会づくりを進めてきた。

実際の分科会構成は、「実践課題・方法論」を主軸に据えたものが中心となっているが、「実践」ベースの分科会とは別に、「当事者交流会」「家族交流会」「10代会議」「若者支援のやりがい」など、社会的属性をある程度限定化して、参加者それぞれの想いを交流し合う分科会も部分的には展開されてきた。この「まどい」分科会も、その系譜に位置づけられるように思うが、とりわけ今回の分科会で画期的だったのは、焦点を「まどい」という普遍的かつ曖昧なものに定め、属性を問わず間口を広げて設定した点にある。

それこそ「日常」の場面では、「支援／被支援」「上司／部下」「委託者／受託者」など、けっして対等にはなり切れない属性の人びと同士が、フラットに出会える場をつくることは容易ではない。それに対し、「立場・属性を超える」ことを明確に打ち出すとともに、日々の日常現場から離れて全国各地から集う「非日常の空間」だからこそ、日々の日常のなかで抱えたモヤモヤを「ここなら吐き出せる」という期待がかけられていたように思われる。

その懇親会へのニーズは、実践そのものというよりも「わたし」（と同じような想いで取り組んでいるあなた）との出会いを求めているのだと想定される。

日々の日常のなかでは抑え込まれがちな「わたしの想い」を、評価や期待のまなざしに晒されることなく出し合い、交流していける場をつくっていくこと。そのことが、今後のJYCの活動の一端として求められているように思う。

心のサードプレイス～キャリアブレイクという考え方～

執筆者：宮内 大志

一時的な離職や休職、休学などを欧米では「キャリアブレイク」といいポジティブな期間と捉えられています。

日本でも浸透すれば多くの若者が救われると思うのですが、キャリアブレイクについて一緒に知ってみて感じてみませんか。

コーディネーター

北野 貴大

一般社団法人キャリアブレイク研究所

兵庫

実践報告

宮内 大志

認定 NPO 法人育て上げネット

大阪

2024 年 12 月 21 日に JYC フォーラムが主催する全国若者ひきこもり協同実践交流会 in 関西にてキャリアブレイク分科会を実施した。

今回は当日の状況だけでなく、一人の不登校・

ひきこもり経験者且つ若者支援者である宮内が、何故キャリアブレイク分科会を実施しようと思いい、実際に実施したのかをこちらの「報告書」でお伝えする。

若者支援を仕事にした理由

学生時代はクラスメイトからのいじめや無視が原因で、欠席日数の多い不登校ぎみな子どもだった。

しかし親から「高校だけは出ておかないといけない」、「学校へ行きたくなかったら働け」と言われ、先生からも「そんなに休んだら進級でけへんぞ!」と脅しをかけられていたので仕方なく高校卒業という「資格」を得るため学校に通った。

そのころには「働く」ということは「学校へ行けない人間がやること」という否定的なものになってしまっており、本当は行きたくなかったが、それよりも働きたくなかったため大学に進学してしまう。

そんな理由なので全く講義についていけず、周りとも馴染めなかったこともあり大学入学後すぐに退学してしまった。

大学退学後は、人とコミュニケーションが苦手

な自分を改善しなければ社会で野垂れ死んでしまうと思い、コンビニやアパレル店、営業職で人と関わる仕事に就いた。この時期に、表面的には人とコミュニケーションをとることが苦手ながらも生きていく分にはなんとかかなるかな、程度のコミュニケーションスキルは身についたと感じている。

とはいえ、仕事を辞めてすぐに次の仕事に就くわけではなく、毎回ひきこもり状態が1年ぐらい続いた。そのたびに自分の中で「これ以上ひきこもったら社会に戻れなくなるかもしれない」という恐怖が沸き、なんとか自分を動かしていたが、30歳を手前にして「やりたいことがない」自分では働き続けることが難しく感じ、経験のある仕事に就くことが良いと風の噂で聞いたため、自身の不登校やひきこもり経験が生かせる若者支援職に就いた。

キャリアブレイク研究所について

キャリアブレイクという言葉を知るのは、以前から面識があり今回の分科会でもご登壇いただいた一般社団法人キャリアブレイク研究所の北野さんとの出会いがきっかけだった。

初めて彼と出会ったときは企業で働いており独立される前だったのだが、気づけば世間にキャリアブレイクを広める活動をされていた。

キャリアブレイクは一時的に仕事を離れ自分の

キャリアを見直し、スキルアップやリフレッシュを図るための期間を指すという。これは単なる休暇とは違い、意識的かつ積極的にキャリアを中断することを目的としている。特にイギリスやベルギーで浸透している文化だそうで、当たり前のように行われているという。

正直なところ、スウェーデンにおけるギャップイヤーのようなものかと思っていたのだが、キャ

リアブレイクは既に働いている人が一時的に仕事を離れ、自己成長やスキルアップ、リフレッシュを図るための期間である一方、ギャップイヤーは主に若者が進学や就職前取る期間であり、目的やタイミングが異なっていた。

キャリアブレイクの目的は多岐にわたるが、主には自己分析とキャリアの棚卸し、スキルアップと学び直し、心身のリフレッシュ、新しい可能性の探求というのがあげられる。

上述の内容だけだと、転職ビジネスを扱う企業が毎日のようにメディアへコマーシャルを垂れ流す日本で転職サービスを利用した経験のある人たちにとっては珍しさを感じないが、北野さんたちはキャリアブレイク自体を日本に浸透させ、その人自身が主体的に動くことに意味があると考え事業展開されている。

どれも面白い活動だと思っているが、筆者が興味を抱いたのは「無職酒場」、「月刊無職」、「むしょく大学」の3つである。

「無職酒場」は、現状無職であれば飲食代が無料になるという、飲食店を間借りしておこなわれるイベントである。とかく世の中の集まりというのは、何がしか具体的な同一の活動をしている人たちが集まるわけだが、無職酒場はただ「“いる”だけで集まれる空間」だという。実際に1度足を運んだことがあるのだが、SNS等で開催を知っ

分科会でキャリアブレイクを取り上げた理由

一昨年に、国が日本国内のひきこもり状態の方の人数について、これまでの約115万人から約146万人に増加したことを発表した。数字のマジックはあるにせよ、個人的には前述の結果は従来の若者支援施策が失敗だったのだと捉えた。

実際に筆者自身の経験から、働き始めることも大変だが働き続けることはより大変だと感じてお

キャリアブレイク分科会

今回の分科会では、先ほども触れた一般社団法人キャリアブレイク研究所代表の北野さんと、キャリアブレイクの実践者として2025年より復職されることが決まっていた木下さんにご登壇をお願いした。

また、筆者自身は大阪にて実施している「売らない珈琲屋さん」についてお話をもらった。

「売らない珈琲屋さん」だが、筆者が所属するNPO法人育て上げネットが大阪市より事業を受託している若者の自立のための支援施設であるコネクションズおおさか内のプログラムである仕事

て集まった人たちが何十人もいた。筆者が参加した会は開催場所が大阪だったものの東京からやって来た人たちもおり、思っていた以上に無職や休職状態の方々が居場所とは言わないまでも集える空間を求めていることを強く感じた。

続いて「月刊無職」だが、毎月6日の「無職の日」に発刊されるキャリアブレイクについての情報誌である（毎月6日が「無職の日」だとは知らなかった）。

この情報誌ではキャリアブレイク期間にある当事者や経験者が書き手となり、自分自身のエピソードや思いを文章で表現している。

世の中には無職中や休職中にSNSで自身の思いを発信する人たちもいるが、執筆者同士がチームになって「月間無職」を発刊されていることもあり、チームとして活動する、というところに執筆者たちが一人だけの発信では経験できない機会を与えているように感じる。

最後に「むしょく大学」は、参加者が気持ちを整理し感性を回復させることを目的に、オリエンテーションや「自主授業」という参加者が自分を主語にして話す時間を持ち、自分を見つめ直すための活動をおこなっている。登録者は既に1000人を超えており、就業中の方も参加しているそうである。それほどキャリアブレイクを必要としている人たちが多いということだろう。

り、それはこれまで関わった若者たちと共感できることだった。そのため、本当に若者たちにとって必要なもの・ことは何なのかを模索している中で、少なくともキャリアブレイクという文化は「働く」ことに悩む若者全ての救いになるのではないかと考えたことが、今回キャリアブレイク分科会を実施することにした理由である。

体験がきっかけにある。

仕事体験では、様々な企業や団体に協力してもらい、就労経験のない・少ない若者へ実践的な経験を積んでもらっている。

その中で大阪市内の喫茶店での仕事体験にチャレンジした若者がプロ顔負けのコーヒーを淹れられるようになったのだが、彼に「仕事でコーヒーを振舞えばええやん」と言ったところ、彼は仕事ではやりたくないとのことだった。詳しく聞くと、自分のコーヒーを人に売ることによってそのコーヒーが批評の対象になるため、「もし美味しくないと言

われたら不安だし、言われなくてもそう思われていることが不安」だと打ち明けてくれた。

その話を彼から聞いた時に、であれば売らずにプロと同じ工程でコーヒーを人に振舞えば彼が色々な経験をできるのではないかと考え今も実施しているのが「売らない珈琲屋さん」である。

前述の3名が報告を終えた後、キャリアブレイク分科会会場にいらっしゃった方々に自己紹介と参加して下さった理由を伺った。

本当に色々な方々がいらっしゃっており、支援職の方はもちろん、ひきこもり当事者と同居しているご家族や、まさに今キャリアブレイク中であるという方、企業の総務部で責任者をされている方など多彩な顔触れが参加してくれていた。

また、彼ら一人一人からお話を伺っていると、多くの方々が離職期間や休職期間を経験されており、そのことをポジティブに捉えていらしかった。キャリアブレイク経験者なのである。

とはいえ、日本社会で離職期間や休職期間がネガティブに捉えられていることもあり他者や他人に話せていなかったようである。そのため、既に北野さんがマスメディアや大手企業でもキャリアブレイクについて発信してくださってはいるものの、引き続き啓発活動が必要であることは事実であり、筆者も多方面で話をしていくことを強く決

意した。

地道な活動ではあるが、世の中にキャリアブレイクを経験された方々がいることを若者たちに知ってもらい、その結果、彼らにとってネガティブに捉えられていることが予想される離職期間や休職期間を、少しでも良いので肯定的に捉えられる世の中になれば意味のある活動だといえる。今回出会った方々がご自身の経験を気兼ねなく若者たちに話せる社会にしたい。

さて、今回のキャリアブレイク分科会がきっかけで新たな出会いが生まれた。ご参加くださった企業の総務部で責任者をされている方がキャリアブレイク期間中の方の相談に乗ってくれることになったのである。

率直に、人と人との直接の出会いが新たなきっかけを生むことを目の前で見ることができたのは嬉しい。今回のような場を設けることがどれほど重要かを確認することができた。

最後に、テキストでキャリアブレイクや当日の分科会のことを書いたが、もしこちらを読んでもなさっている方がいるようであれば、その方にキャリアブレイクについて知ってもらえればありがたい。ネット上にいくらでも情報は落ちているため、是非！

草の根の活動を考える——つくり手たちのライフストーリー

執筆者：阿比留 久美

現在、若者の就労支援・学習支援・こども食堂などの活動は、全国各地で展開され、あらゆる人の知る活動になっています。国・自治体で実施されている事業の委託を受けると、団体は安定的に委託収入を得て事業を実施できますが、一方で規定された目的・内容のもとに、仕様書に基づいて事業を実施しなければなりません。それに対し、地域の団体がそれぞれの問題意識のもとにおこなっている活動では、目の前の子ども・若者が必要としているけれども、社会ではまだ十分認識されておられないようなことに対応した活動がなされていたりします。そのような活動が注目されることはあまりないのですが、そのような活動の意味やそれを支えている思いについて、共有していきたいと考えています。

一緒に企画を準備してきた滝口さんは当日残念ながら体調不良で参加できませんでしたが、滝口さんがずっとこだわり続けてきた問題意識からスタートした分科会です。

コーディネーター

阿比留 久美

早稲田大学

東京

滝口 克典

よりみち文庫共同代表
特定非営利活動法人 Sisterhood 事務局長

山形

報告者

朝日 華子

茨城居場所研究会

茨城

島村 恒平

あいとうふくしモール

滋賀

※当分科会は科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 22K02264 の助成を受けています。

【朝日華子さん（茨城居場所研究会@茨城県）のお話】

私は、東日本大震災がきっかけで、茨城居場所研究会の活動をはじめましたが、普段は福島県と茨城県でスクールソーシャルワーカーやカウンセラー、児童養護施設の心理療法士をしています。そのかわりで、研究もしていて、今年度に博士論文を書きました。自分のキャラクターとして、大きい流れが動き出すと疑問に感じる部分が出てきてしまったりして、その流れにずっと乗っていけない部分があります。

東日本大震災当時、私は茨城県の日立市でスクールカウンセラーをしていて、かかわっていた不登校の子たちの中には高校に進学しない子もいて、その子たちが4月以降の生活にすごく不安を感じている状況だったので、月に一回土曜日の午後に近くの交流センターで会って、生存確認しあえるように茨城居場所研究会をつくりました。その後3年たった2015年に法人化して、NPO法人化して10年が経ったところです。

最初のうちは月に一回、第三土曜日の2時から5時までひきこもりの当事者の方とかが集ま

り、お茶を飲めるような場を開き、それをずっと続けて、時々啓発活動をしたりしてきました。少しずつ活動を増やしてゆき、WAMの助成金が通り、予算をもらえたので、古い貸家の一軒家を借りて、そこで毎週、週に一日空けて若者たちの居場所を開くようになりました。WAMでは単年度の助成金しかもらえませんが、連続して助成金を通ったことで活動を展開できた一方で、助成金に落ちると活動を急に縮小しなければいけなくなります。ただ、今年は、私たちも報告書をつくったり色々考えることに疲れてきてしまっていたので、助成金は申請せず、金銭的にも精神的にもやれる範囲で活動をしていましたが、他の機関の助成をうけながらまたやっていきたいです。

ずっと同じように活動していますが、県や教育委員会にかけあってもなかなか行政からの予算はつきません。定時制の高校で居場所カフェも月に一回しています。他自治体には公的予算がついているところもありますが、茨城県は全然予算がつかないので、持ち出しとボランティアでやってい

ます。

ケアって、区切られた年代では終わらないというか。そういう子たちと、居場所があることでつながりが続いています。居場所に来ている子たちから、20歳とか過ぎてから、やっぱり進学したいとか、家から出たいなという言葉がでてくると、それをきっかけに卵料理を色々つくってみたり、ピクルスづくりをしたりしました。

また、修学旅行も行っていないし、家族も経済的に厳しくて茨城県からもなかなか出たことがなかった子たちと、大阪や東京で若者支援をしている団体などいろんな活動のフィールドワーク旅行に行ったりもしました。全部 JYC でつながった団体で、私は、本当に JYC とつながっていてよかったなと感じています。今も、フィールドワークに行った先のみんなが気にかけてくれていて、「その後みんな元気？」とか「活動はどうなってる？」とか「予算取れた？」と声をかけてくれる人も多いので、すごく私も支えられています。大阪に行った女の子たち2人はその後それぞれまた自分たちで大阪に行きました。それまでは東京より西に行ったことがなかった子が、そういうふうに分けるようになったのが嬉しいです。

活動の内容はすごくゆるっとしていますが、そのゆるさを維持するためにはお金が必要で、その

【島村恒平さん（あいとうふくしモール@滋賀県）のお話】

滋賀県東近江市のあいとうふくしモールで「あいとうむすび」というおむすび屋や「若者の居場所を OMUSUBI」という若者の居場所をやっています。自分の経験に即してやりたいと思うことをしてきたところ、それを支える制度はなかなかなくて、小さいまま続けているという感じです。もともとは埼玉県出身ですが、大学2年で大学を辞めて少し引きこもったりして、東京の若者支援団体に出会い、そこから若者支援の世界に入ったので、ピアスタッフのような立ち位置で活動を5年ぐらいやってきました。でも、徐々に元当事者として働き続けることに行き詰まり感を感じるようになってきて、そんな時に、パートナーの仕事の関係で滋賀にきて、あいとうふくしモールに出会って活動をスタートして10年になります。

あいとうふくしモールの母体となる団体は3つあって、高齢者の暮らしを支える NPO 法人結の家、障害者の就労支援の NPO 法人あいとう和楽、食を通じた地域循環をめざす株式会社 あいとうふるさと工房で構成されています。それぞれは独立した事業所ですが、それぞれの代表がも

ために一生懸命、助成金申請や報告書などの書類を作ったりしなければならなかったりします。また、「ゆるくていい」と言っているのも、若者だけでなくお手伝いに来てくれる人も、結構ゆるかったりして、当日急に来なかったりすることもあります。本当にカツカツで運営している中で、そういうことがあると残念だったり、がっかりしてしまうこともあったりします。

私たちは、本当に草の根で活動していて、この10何年間委託事業は1個も受けていなくて、地域の人に協力してもらったり、自分で書類を書いて助成金をもらったりして活動しています。補助事業や助成事業を取ってないと、自由にやれる反面、自治体からのサポートがなにもありません。一方で、今はこども家庭庁とかで予算がついて、色々事業化されていますが、大きいお金が動くときに、地元の団体ではなく、全国展開をしている大きな組織が委託を取ってってしまう傾向があります。行政にアプローチしてもあまり聞いてもらえなくて、市議会議員さんの勉強会に呼ばれてお話ししても、それっきりになることが多いです。

でも、こういう場所で話させてもらったり、JYC につながった人とか、いろんなところでつながった人とお話ししたりとか、応援してもらったりすることで、元気をもらってます。

ともと愛東地域で活動されている方々だったので、1つの事業所で活動していると、制度のくくりによって、これ以上は支援できないというようなことがたくさんでてきたので、そういう制度の隙間を埋めるような取り組みを作っていこうということで作られたのがあいとうふくしモールです。そこでやる事業のひとつとして、働くことに不安がある若者が通える場所を作ろうということで OMUSUBI の活動ははじまり、この事業も朝日さんと同じように WAM の助成をもらいながら、取り組みの全体像を4年かけてつくっていきました。

この地域で生きていけると思えるような場所を地域に広げていく最初の入り口として「働く」に対応する部分をつくり、おにぎり屋で働く体験をしながら、若者が通える場作りをしています。「働きたい」という思いでつながってくれても、一緒に作業をしながら日々を過ごしていくと、ただ働けるようになればいいということではないんだなということが見えてきます。でそこで、「ちゃむちゃむ」という会をつくって、みんなのいろんな

思いを出しあえる語り合う場を作りました。かわりができてって、本音を聞くと、ただ就労を目指すだけでなく、もっといろんなことがしたいということで、メイクやファッションをする講座をしたり、ボードゲームで遊んだりしています。

あとは、就職した後も月に一回交流できる機会を毎月開き、クリスマス会や、お出かけしてボーリングに行ったりということもしています。

大事だと思うのは、若者の声は日常的にこうかわれる場所があって、その中でやり取りで出てくるものだという事です。支援って言うてしまうとイメージは相談窓口とか就労支援で、うちに来てる方も支援につながっている方は多いのですが、相談窓口につながっても、なかなか就労支援に乗れないでいると、月に1回2回の相談の日以外は行く場所がなく、家で1人でいると、いろんなことがぐるぐる回ってしんどくなってしまうたりします。若者が所属をなくしたときも、ふらっと通える場所っていうのが大事だなと思います。

若者がしたいことを実現したり、若者の日常を支えられる場所を作りたいなと思って活動しています。うちに来ている若者たちで正社員になって安定して働けるようになった若者はほとんどなくて、多いのは週2日、3日アルバイトをしている感じです。そういう若者たちと喋っていると、

【全体の議論】

- ・単年度の助成金をもらいながら活動を続けていると、毎日をこなしていくのが精いっぱい、5年後10年後の見通しが全然立たない。
- ・発達障害をテーマにしたフリーペーパーを作っていて、ニーズが多くてどんどん部数は増えているけれども、広告協賛費は安定せず、手伝ってくれるスタッフの人に安定した報酬が払えないという葛藤があって、共感した。
- ・今、初めて助成金をとって活動しているが、通ったら通ったで、助成が終わった後が見えない。どうやって、気持ちを維持させているのかをちょっとうかがいたい。
- ・飯の種になっているかいなにかに限らず、草の根の活動の場合は、仕事だからやるという割り切りではなく、「困ってる人のために」になりすぎず「自分がやりたい」が軸にある方が健全であるように思う。
- ・最近、若者の声を聞くという言葉がやたら使われるが、支援側のペースで聞いているところがある。聞くのあり方も様じゃないということが今日は共有されていると思う。
- ・小さな活動だからできることもあるけれど、大

自分自身の生きづらさを分かっているのもそういう働き方を選択する若者が割と多いです。就労がゴールにはなかなかない若者がたくさんいる中で、どんな状態でも通える場所があるというのは大事だなと思っています。

最後に活動を振り返ると、割と活動の中身の話をしてしまったのですが、あいとうふくしモールはこうやって紹介すると、まとまった組織のように見えるのですが、なかなかこういう活動のお金が見つからないのが実態です。現場は毎日楽しいのですが、おにぎりの売り上げと助成金を取ったりしながら活動を続けていて、来年どうなるのかわからないというのが毎年感じているところです。助税金が取れると、WAMなどはわりとドーンと助成してくれるので、それをうまく消化していくのもなかなか大変です。

一緒にやっている活動をしてしてくれてる仲間はいらっしゃるのですが、基本正職員は僕しかなくて、あとはパートさんなので、なかなか気持ち的にもしんどいなと思ったりする時がありますし、活動を広げるにも、人探しが難しいです。個人的には一緒に運営をどうやっていくかを共有しながら、やっていってくれる人を見つけていくのが難しかったりします。

きいからできることもあって葛藤する。組織が大きくなっていくと、ずっとパソコンと向き合うようになり、子ども・若者と向き合う時間が減っていく。それは、自分がやりたいこと、自分の居場所でもある場をつくることと真逆な感じだ。

- ・同じ思いでやってる人たちがいっぱいいることが感じられて、嬉しい。気持ち的に、続けていけるようにエネルギーをもらえたり、励まされるような場や関係をつくっていったらいいなと改めて感じたけれど、一方で、霞を食っていくわけにはいけなくて、綺麗事ではない。草の根のつながりは大事で、カテゴリー化されない、カテゴリーに収まりづらいような活動の人たちが、語り合えるような場があったらいいなと思うけれど、霞ではない話も同時並行で考えたい。
- ・いろんな自治体から、自由に活動できる助成金を出してくれると、こういう小さい活動は励まされるし、それを通じてネットワークができる。現実化できる夢を考えて、そのうちの1つか2つでも実現すれば、少し気持ちを支えるだけではないものができるのではないかな。

「生きる、つながる、ひらく」を支える“表現”を考える

執筆者：南 摩周・角 亮典

若者支援や居場所づくりの実践において、“表現”はどのように位置づけられているでしょうか。“表現”は、就労に踏み出すための体験や経験、すなわち余暇活動のひとつであるという位置づけられることもあります。しかし、本分科会で私たちは、文化活動や“表現”は、人が「生き」、自分以外の存在と「つながり」、自分を「ひらく」営みを支えるものであると仮に位置づけ、「生きる、つながる、ひらく」をテーマにし、参加者とともに“表現”とは何かを問い合う場として分科会を創り上げることにしました。



コーディネーター

南 摩周（みなみ・ましゅう）	任意団体 yorai.	大阪
角 亮典（すみ・りょうすけ）	任意団体 yorai.	神奈川

Day1 実践報告

石坂 杏子（いしざか・きょうこ）	fatrripm	長野
上田 假奈代（うえだ・かなよ）	NPO 法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）	大阪
藤原 沙羅（ふじわら・さはら）	みずのき美術館・画材循環プロジェクト「巡り堂」	京都

分科会の概要

本分科会は、「体験パート」と「対談パート」の2つに分かれて実施されました。1日目は2つのパートを同時に開催し、2日目は体験パートのみを開催しました。

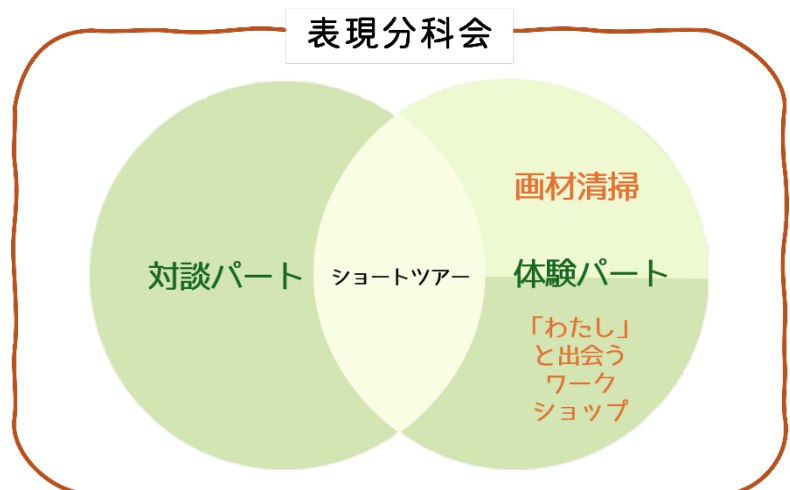
①体験パート

らいとびあ 21 内ホールにて、2つのワークショップを開催しました。1つ目はみずのき美術館主催のプロジェクト「巡り堂」（寄付された廃品画材を若者や美術館スタッフが清掃し、必要としている人たちへ循環させるプロジェクト）と共同で行う「画材清掃ワークショップ」です。巡り堂では、使われなくなった画材を若者たちが清掃する活動をしています。今回は、その清掃活動を参加者の皆さんと巡り堂の若者たちが混ざり合って体験する場となりました。2つ目は、きれいにした画材を使って、「わたし」を自由に表現する『「わたし」と出会うワークショップ』です。表現を見守るアートコミュニケーションと対話をしながら、一緒に

多様な表現を楽しみました。

②対談パート

表現に関わる3名の登壇者と“表現”について対話する座談会を開きました。対談パートの途中、登壇者と参加者が一緒に「体験パート」へと向かうショートツアーの時間も設け、実際に“表現”に触れながら、“表現”について考えられるようにしました。



当日の報告

①体験パート

2つのワークショップをひらいた体験パートは2日間通して実施しました。1日目は15名、2日目は9名の方が参加してくださいました。

会場は、ホールの一画にローテーブルと座布団を広げ、ゆったりと靴を脱いでくつろぎながら表現に親しめる設計に。

手前には巡り堂の皆さんがトラックで運んでくださった寄付画材（企業や廃品回収業者から寄付された画材を清掃したもの）が並べられ、参加者にお渡しし、画材が巡る場所となっていました。



作業≡表現のあるところに集う—画材清掃ワークショップ—



左奥スペースでは、巡り堂のスタッフや若者たちが画材清掃ワークショップをひらいてくださいました。いくつもの箱いっぱい詰められた画材を、エタノールを染みこませた布でひたすらに拭いていきます。シンプルな作業でも、人それぞれの取り組み方やこだわりが見えてきます。それはひとつの“表現”とも捉えられるかもしれません。

ひとりひとり作業を黙々としながらも、隣には他者が座っていて、時にぼそりと、時に大盛り上がりしながら、会話が生まれます。自分のテンポで熱中できる作業があるからこそ、人と人は集えるのかもしれない、と巡り堂の皆さんが創り上げてこられた活動のエッセンスに触れることができました。

「わたし」のかけらが見えてくる—「わたし」と出会うワークショップ—

手前右スペースでは、きれいにした画材を使って、自由に表現を楽しむワークショップがひらかれました。絵の具、クレヨン、厚紙、和紙などの画材を使って、様々な表現が生まれました。表現の場にはアートコミュニケーターと呼ばれる、一緒に表現を楽しみ、対話する人が2～3人いました。表現方法を教えるわけではなく、見守り、楽しむという在り方は、参加者が「うっかり」つられて表現を楽しんでしまう、そんな場面を引き出していました。絵が苦手という方も、筆をゆっくりと動かし、にじみ出る「わたし」と出会っていたようでした。そんな「わたし」のかけらが宿る表現は、心底面白く、表現への好奇心から始まる会話は、話者たちが様々な「わたし」に丁寧に触れながら、軽やかな関係性をつなぐ手伝いをしていました。



②対談パート

登壇者の活動紹介

対談パートではまず登壇者の方からそれぞれの活動を紹介していただきました。

・石坂 杏子 (fatrripm 長野)

石坂杏子さんが「たびするはたけ〜心に寄り添う」はたけ”を耕す旅〜”という言葉掲げ実践されているソロプロジェクトである、「fatrripm」の紹介をしていただきました。東京や長野県上田市を中心に行なっている、ギャラリーや演劇、地域にひらかれた場づくり、ワークショップなどの精力的な活動の様子をお話しいただきました。

・上田 假奈代 (NPO 法人こえとことばとこころの部屋 (ココルーム) 大阪)

上田假奈代さんからは「喫茶店のふり」をして釜ヶ崎に居を構える「ココルーム」の実践、およ

び「釜ヶ崎芸術大学」などさまざまな表現や場づくりの実践の紹介いただきました。数々の出会いやご経験の中から表現や“居場所”についての位置付け、意味などもお話しいただきました。

・藤原 沙羅 (みずのき美術館・画材循環プロジェクト「巡り堂」)

藤原沙羅さんには「みずのき美術館」の画材循環プロジェクト「巡り堂」についてご紹介をいただきました。その実践にいたるまでの背景と、実際にどのような変化が参加者に生じているのか、画材という特徴的な媒体を扱うことによる活動の特徴をお話しいただきました。

フロア参加者も含めての対談

それぞれの活動紹介の後に体験パートの見学ツアーを行いました。体験パートから戻った後に、フロアの参加者が少人数であったのもあり、登壇

者とフロアとを分けずにざっくばらんに対談を行いました。さまざまな観点からお話をしましたが、印象的だったものを以下に紹介します。

・表現をする「場」のあり方について

体験パートでの経験を振り返りました。フロアからは安心できる場での表現が体験されたことや、時間をおくことで表現の捉え方が変わったことが共有されました。上田さんからは道具の清掃という「やること」があることの大事さが挙げられていました。続けて表現活動がされる「場」について上田さんから、アメが真空状態ではできないように、いろいろな空気にふれるしかないので、統制するようなことはしない。それでも「新しい人が1番偉い」というふうにして、場が澁まないようにする必要があるとお話をいただきました。フロアからは学習支援の居場所や、地域における技能実習生の話題があがりました。また校内居場所カフェの実践経験から「作業があったらコミュニティを超える」という発言があり、作業や表現の行為自体によって、支援者の意図に左右されないその場に“居る”ことを支えるのではない

かという話がされました。「巡り堂」の実践を踏まえて、藤原さんから「巡り堂」のスタッフには悩み事や自分のことを話すようになった利用者について、自分たちは画材を綺麗にしてほしいということではじめていたので、それを目標としていたわけではなかったが、作業という役割があることによって信頼や安心が生まれやすくなっているのではないかと指摘がありました。上田さんから加えて、「巡り堂」の活動は捨てられる画材というどう触ってもいい安心感と、画材が巡っていくという先が見えていることも良いのではとお話がありました。石坂さんからは旅人として、「巡り堂」や「ココルーム」と違い様々な場所に行った先で、即興的にそこにいる人の「ウズウズ」を引き出すように意識をして実践していることを共有していただきました。

・表現と“支援”の距離感

表現や作業が“居る”ことを支え、相談や自分の困りごとや悩みを吐けるようになっていくような変化があることが話題にあがりました。しかし、支援に役立つ情報や関係を構築するために、表現

活動をしているわけではないが、どうしても手段的に表現や作業の実践が位置づけられてしまいやすいこと、その時に表現活動の実践者はそれにどのように対峙すればよいのか、と論点をコーディ

ネーターから示しました。

藤原さんからは「巡り堂」は表現を支えるという立場ではあるとしつつ、表現や創作の難しさにふれ画材を通して関わることでできたらということと、居場所性を重視するのか、年齢や属性の受け入れの幅を広げるのかということを検討しているというお話をいただきました。上田さんからはコロナ禍に入ってアートとケアの議論が止まってしまった、芸術は不要不急であるとされてしまった。今またアートとケアが注目されつつあるが、それは喉元過ぎればということもあるしそこでのアートは、支援する側にとって得になることに限

まとめ・今後に向けて

参加者とともに“表現”とは何かを問い合う場として分科会を企画しましたが、体験パートと対談パートの2つのパートを通して、身体と言葉の両面から問い、表現することに向き合うことができたと考えます。表現することや身体を使うことが「場」に“居る”ことを支え、その人の安心や信頼を育むことが改めて確認することができました。また、それを決して支援の手段に落としてし

定されているのではないかと指摘がありました。被支援側とされている人たちの表現がいかに関心を励ましているのかを認識する必要があるともお話がありました。また居場所については、誰かにとって居場所になることでその人たちしかいられないからこそ、「居場所であることは居場所ではない」として活動されていることをお話いただきました。石坂さんからは、私の演劇と出会ってくれた人たちの心を守っていきたいと思っており、まずは出会うこと大事にして表現の場を守っていききたいとお話をいただきました。

まうのではなく、そのものの意味やメッセージを受け止めていく必要性についても話し合うことができました。

今後も対話と探究の姿勢は保ちつつ、若者支援の文脈や構造においてどのような意味や可能性を持つのか、具体的な問いと実践を深めていきたいと思います。

自分たちの経済と地域（マルシェ）

執筆者：湯浅 雄偉

ひきこもり・若者協同実践交流会で10年近く続けてきた「仕事づくり」という分科会がありました。仕事づくり分科会では、各地で若者とかかわる中、必要に迫られて、あるいは偶然の産物やご縁を活かして仕事生まれ、さらに仕事を能動的に作り出していくプロセスを各地の実践者たちに報告してもらいました。長年仕事づくりの魅力的なストーリーを聞くにつれ、下記のような疑問がいつの会も関心の的になりました。

- ・どんな若者たちが実践の中心的な働きを担っているのか。若者たちが参加する仕組みや働きかけはどのようなものか。
- ・どのような制度で支援者たちの人件費を支え、どのように仕事を作り出すのか。
- ・実際にどんな製品なのか？
- ・地域の人とのかかわりにはどんなものがあるのか？

など尽きる事はありませんでした。一方で、これまでの仕事づくり分科会の運営者や報告者でしばしば話題にしていたのは「話はもう満腹だから、実際の現場をみたい」「そろそろ、みんなで食べて飲んで交流したい」「話しつつ、各取り組みが経済的にも潤う形が分科会でできたらいい」という話題を交わしていました。そのような流れで、仕事づくり分科会は屋台分科会という企画名で長い間アイデアとして温められ、今回「地域と経済」分科会として実施する運びとなりました。

コーディネーター

中村 雄介	NPO 法人暮らしづくりネットワーク北芝	大阪
野中 康寛	社会福祉法人一麦会	和歌山
猪熊 晃	NPO 法人キャリアブリッジ	大阪
湯浅 雄偉	社会福祉法人一麦会	和歌山

1日目：実践報告&出店 [21日(日)15:00-17:00]

マルシェ出店の方々	関西
オシテルヤ イカ焼き ジャパンコーヒーフェスティバル（略称 JCF） 創カフェ 柿そぼろ丼	

2日目：話題提供 [22日(日)9:30-11:00]

藤井 敦史	立教大学	東京
-------	------	----

実施概要

1日目はマルシェ出店者による一歩踏み込んだ仕事づくりの実践交流を深め、2日目は自分たちの手の届く経済、新たな働き方、暮らし方について全国から集まった参加者と意見を交わしました。新たな特徴として、報告者は同時に出店者で

あり、若者と共に普段から取り組んでいる「屋台」形式で販売し、食べて飲みながら交流を図りました。また2日目の分科会終了後は大会現地で開催されていた芝楽広場でのマルシェに合流し、さらなる販売と交流が進む仕掛けとしました。

1日目：屋台販売と実践報告

1日目は、「オシテルヤ」（イカ焼き）「ジャパンコーヒーフェスティバル」（珈琲）、創café（ミニ柿そぼろ丼、ドリンク、コーヒー）がそれぞれ

の屋台で販売してもらいました。イカ焼きのおいしい匂いの隣でおしゃれな雰囲気漂わせる珈琲焙煎の香り、さらに奥には地元産の柿を使用した

そばろ丼ぶりを売る楽し気な屋台が立ち並び、お祭りのような雰囲気でした。それぞれの屋台で販売をしてもらうなか、

①どのようなきっかけで始まった取り組みなのか

②どのような出会いがあったのか

③販売の上での苦労などを分かち合いました。

それぞれの取り組みは10年近くになるため、

・集う若者たちにあわせて柔軟に実践をつくる

—**オシテルヤ**：(NPO 法人一房の葡萄) の実践の発端は車椅子に乗る青年たちの仕事づくりだったが、体調不良で欠勤を重ねていくようになった。関わりを重ねていく中で、目に見えている障害ではなく、目に見えない障害(精神的な不調や発達障害などが挙げられていました)に対して丁寧に関わることを大事にするようになった。NPO 法人の活動の主軸は学習支援だが、何より安心できる場づくりを大切にしている。

—**JCF**：珈琲焙煎の講師をしていた代表が、月2回開いていた焙煎講座で若者たちと出会った。珈琲を囲んで生まれる自然な会話が若者にとって居心地がよいことに気づき、他方で若者たち

・大事にしていること：拒否する権利(自由)を保障する

—**オシテルヤ**：イカ焼きの役割などは自分たちで決めている。スタッフの榎さんが被るイカの被り物は、イカ焼きを出店する際に誰かが被る。これまでに被った人の進路が明るいものになったという縁起物だが、今日は誰も被りたがらないとのこと。(スタッフの榎さんが自由な出立ち、ずっと楽しそうにしており、当日は「ずっとうまくならない」と話すウクレレを片手に会場をフラフラと弾き歩いていた。そんなスタッフの振る舞いぶりも、若者たちが伸び伸びとできる理由の一つに見えた)

—**JCF**：焙煎講座では、若者たちが勝手に豆を選び、焙煎し、挽いて、飲んでいる。そこにはスタッフの「こうしたらいいよ」などの介入はほとんどなく、自分たちの探究心に基づいて感想を述べ合っている。このゆったりとした時間の流れが若者に合っている。そして単に自分たちの好

む余曲折はあるものの、参加する様々な若者たちの意見や行動をスタッフたちが受け止めながら、実践をつくりあげてきたことが伺えました。一つ一つの紹介は紙幅の都合上難しいため、ここでは各実践がもつ共通点について挙げたいと思います。

仕事への就きにくさや自立の難しさに気づく。その後、「大東市若者等自立サポート事業」を受託すること。

—**創力フェ**：活動初期は、不登校の若者たちの居場所や相談事業をしていた。集まる若者たちの間で映画に行きたいという話題になり、みんなで行こうと約束を交わした。いざ、映画に向かうと他の人が来なかった。来なかった人の話を聞いてみると、普段から働かないことで引け目に感じている中、遊びに行きたいとは言えなかった。そこで、自分たちが遊びにいけるお金を生み出していきたい、と色々な検討のなかから焙煎珈琲をすることになった

みだけではなく、珈琲の売り上げが若者たちに還元されるからこそ、珈琲を入れることに時間と労力をかけており、自信をもって提供している。飲む人の率直な感想を若者たちは求めている。

質問

ときに、ふるまい珈琲として無料で高齢者施設や社会福祉協議会のイベントなどでコーヒーを振る舞っていると聞きました。周りの大人は無料だからこそ享受できることなど勝手に期待もするが、若者たちはどんなふうにそういうイベントを受け止めているのか？若者の声を聞きたい

答え

珈琲を淹れている若者は回答を拒否。その代わり、元当事者であるスタッフとしての見解は宣伝機会！と思ってやっていると答えてくれた。(回答を拒否できる実践の空間が垣間見えた)

2日目：講演 12月22日9時半～12時

2日目はコーディネーターによる一日目の総括報告で振り返り、講演では立教大学の藤井敦史先生による「社会的連帯経済」をテーマとした理論報告が行われた。講演の詳細は紙幅の都合により

割愛するが、ここでは若者協同支援実践との関連で大切と思われるワードを書きだす。また、11時からお疲れ気味の参加者から希望を募り、JCFの珈琲が振る舞われたことも今回の分科会では特

筆すべきことだった。

◆連帯経済の定義：コモンズ（自治）の再生、命のサブシステムエコノミーの創出

＊研究：社会問題は市場化のみでは解決しえない（コミュニティ×市場×制度）多元的ハイブリッド性が供給主体には求められる。実際には、「組織」と「（オルタナティブな経済）運動」の多様な実態を反映した掛け合わせの表現である。

＊国や地域で異なる文化的・思想的・宗教的背景が連帯の基盤となる。日本においても既存の自治（結・講・農業など相互扶助文化）を背景にする実践も。

◆経済とは何か？の再考から始める（カール・プランニー）

＊誰からも制約を受けない自由ではなく、他者に対する責任ある自由を構想。例：フィリピンのバナナは美味しいが、プランテーションによる環境破壊や過酷な労働環境が指摘されている

＊グローバル資本主義は責任免除のシステムと喝破。応答的関係のなかで「透明性」を高める民主的ガバナンスが必要。

＊規模の小さな、顔の見える、異なる他者同士が相互理解を深める、ローカルに根差した自治を作り出す必要性を提起した

◆なぜ、協同実践に社会的連帯経済のコンセプトが必要か

＊社会的排除は複雑な問題の絡み合いと考えられている。ゴールは単純な就労（自立）なのか。単一組織で、この問題の解を持つことは不可能。

＊重要なのは、当事者が地域で生きていける経済（サブシステム・エコノミー）を連帯関係を基盤に創り出すこと。文化・社会関係資本を高め、人生を豊かにしていける自治的地域コミュニティが求められている。

＊市場経済だけでなく、互酬や再分配も組み込んだ経済活動を志向していくべきではないか

意見交換

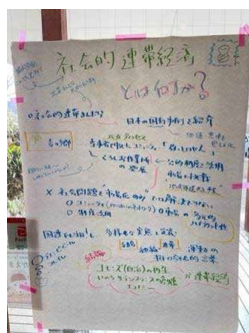
一時間近い時間をつかい、参加者は活発に意見交換、質問が行われた。

次の分科会でヒントとなりそうなキーワードをいくつか挙げる

- ・就労訓練だけではしんどい。挑戦して、失敗してもなおまた帰ってこられる場づくりを
- ・身近な関係のなかで、役割やスキルがいきる関

係づくりも求められる

- ・全国の実践の場で交換留学的に当事者が行き来できる仕組みづくりを
- ・終身雇用を目指す限界。ナリワイ、さまざまな小銭稼ぎの場。シェア労働など接合が必要なのでは。生き方（働き方）の多元的なモデルの提案



左：2日目の様子、中央：板書の一部、

右：乾杯マーケット中の人形劇の様子。JYC 参加者も多く参加した

その他

11時以降は、NPO 法人暮らしづくりネットワーク北芝の主催する「乾杯マーケット」に、JCF の珈琲スタンド、オシテルヤのイカ焼きが参加した。このような交流も、地域と経済をテーマとする本分科会で初めておこなわれた。「地域と

経済分科会」としては初の運営となったが、人と人が出会いなおし、傷ついた経験をゆっくりと癒す経験に、経済活動がつながり、重なり合っていくプロセスを今後も深めていきたいと感じた。

実践を描く・言葉にする分科会

執筆者：松村 幸裕子

「あなたたちはどんなことをしているのですか？」と問われたとき、団体のビジョンミッション、活動内容は答えられても、支援対象としている人たちの変化は答えられても、ともに活動している若者たちのことは答えられても、「わたしは何をしているのか」についていざ問われると「はて？」となることはないでしょうか。また、自分たちの実践について、人それぞれ大切にしていることや価値を置いているところを違ったままにしまい、結局自分たちの活動の総体としての実践の価値を外の人たちに伝えることができていないということも起こっていないでしょうか。

自分たちの実践の価値をわかりあえる人たちの間で活動を続けていけるのであれば実践の価値を誰かに説明したり、言葉にする必要はないかもしれません。しかし、活動を続けていくためにはさまざまな原資が必要です。活動の規模が大きくなればなるほど、自分たちの実践の価値についてを誰かに伝える必要が出てきます。そんな中、私たちが若者たちと共につくっている実践は、社会の中でなかなか知られていないことが多いです。なぜか遠くにいる人たちは良く知っていて、同じ地域に居住している人たちは知らない…ということも往々にしてあります。若者たちとともにつくる実践を続けていくためにも、実践の外側にいる人たちの中から協力者や応援者を見つけていくことが必要です。そのためにも、私たちの実践は「なに」でどんな価値があるのかその人たちがわかる言葉で紡ぐ必要があります。

この分科会は「評価」分科会の後継として、自分たちの実践の価値をどう見出すか、それをどう活動の周囲の人たちと共有するかについて、分科会に集った人たちの実践をもとに自分たちの実践を描く・語る・言葉にすることに挑戦しました。

話題提供として、中塚史行さん（NPO 法人教育サポートセンター NIRE）からユースワークの価値を社会に示すためにイギリス（イングランド）で開発された Storytelling Workshop の取り組みについて。もう一人は、大庭佳乃さん（NPO 法人 TEDIC）から日本で開発されたふりかえり評価の体験および団体内での実践の価値を言語化している渦中についてお話いただきました。

コーディネーター

松村幸裕子	共奏学舎	大阪
鈴木綾	NPO 法人こおりやま子ども若者ネットワーク	福島

コメンテーター

竹久輝顕	（公財）京都市ユースサービス協会	京都
------	------------------	----

実践報告

中塚史行	NPO 法人教育サポートセンター NIRE	東京
大庭佳乃	NPO 法人 TEDIC	宮城

報告1：中塚史行さん（NPO 法人教育サポートセンター NIRE）より

中塚さんは普段は東京品川で子ども若者応援フリースペースにて子ども・若者に関わっている。この数年、法政大学の平塚真紀氏の科研に関わり、

北欧やイギリスのユースワークについて学びながら自分の実践や経験を照らし合わせている。

＜実践者が自身の価値観に基づいた経験をストーリーとして語り共有するという方法＞

ユースワークの先進地であるイギリスにおいても緊縮財政によるユースサービスへのコストカットは顕著となっている。予算が削られる中で、ユースワークを守ろうという運動がイギリスの中で高まり、その中で、ユースワークとは何か、自分たちの活動の価値はなんであるのかを問われるようになった。その中で開発されたストーリーテリングワークショップでは、ユースワーカーが若者たちとの関わりの中でこれがユースワークであると思える実践や場面を振り返り、各自のストーリーを1分程度でまず語る。そこに同じグループのメ

ンバーが質問をして答えていくというスタイルをとる。特徴的なのはアンピッキングという、ストーリーのどこがユースワークなのかということに参加者で話し合い聴きあう時間である。人のストーリーを聴いて、自分の実践がよみがえってくることで、ユースワークの価値をすり合わせていくことができる。そうした議論を元に言葉にされることで「これがユースワークである」というものが世の中で通用していくことにつながっている。

報告2：大庭佳乃さん

大庭さんはNPO 法人 TEDIC に入職して4年。TEDIC は東日本大震災のすぐあとに立ち上がった団体だが、代表の交代や職員の入れ替わりを経験

し、「TEDIC らしさ」とは何か、という価値の継承に課題があると感じている。

＜団体らしさとはどのようにして作られ継承されていくのか＞

団体や活動の価値を見出していくにあたって、設立者へのインタビューを実施。東日本大震災後の学習支援活動から始まった組織の歴史と活動の中で価値を見出していった経過を聴きとり、創業時の価値にとらわれることなく、今活動するメンバーや活動の中から見えてくる価値を見出し受け継いでいくことで良いのではと逆に問われ戸惑いを感じた。なぜなら組織の変化に伴い様々な経歴や価値観をもつスタッフが増えてきた中で、価値の共有や継承する難しさがあると感じたからである。コロナ禍前まではおこなわれていた活動後の長時間の振り返りや大学生ボランティアの卒業式の中で語られる活動の中で得た学びなどを共有し合う中で設立者の発した「TEDIC らしさ」に安心

する自分があると語る大庭さん。しかし、設立者が去った団体の中で「本当にこれでいいのか」「本当にいいことなのか」と自信が持てない状況となった。そんな中体験した「ふりかえり評価」では、心理的に安全性が確保されている環境で、感情を含めて話す、結論やまとめを出さないという特徴からそれぞれ個人の価値が見えてくることで、ふりかえりの場が変質してきたと感じている。何のために活動しているのか、立ち戻る先があることでそれぞれの価値がすり合わさっていく。今後は自分たちの言葉でミッションビジョンを言語化しようと考えている。

議論のポイント

活動の価値と活動の中で立ち戻るポイント～伝えていくことと良くしていくこと

活動の価値は決して誰かに活動のことを説明するためだけではない。活動を続けていく者にとっても何のために誰のためにこの活動をおこなっているのかを確認するためのものでもある。

一人の人が同じ想いを持って活動を継続させていくこともあれば、違う人によって担われていくこともある。前者ではその活動の価値の拠り所が創設者等に託されがちとなるが、後者では活動を

担う自分の実感を言葉にしていけるためにも「立ち戻る先」が必要である。「立ち戻る先」とは、活動の中で発見された価値もあれば、関わる若者たちが感じることで、活動を始めた人の想いなど、さまざまである。正解はなく、その場や機会を共有する人たちの中で、「立ち戻る先」は何であるのか確認していくことが必要だろう。

価値を語り合うときの安心と安全

若者たちとの関わりや自身のふるまいを振り返

り、その中から価値を見出し共有し合うときに大

切なことは、安心で安全な空間や関係性が担保されているかにある。子どもや若者と共に活動を作り上げるときに彼ら彼女らの想いや声を大事に扱う基本的な姿勢と同様に、自分たち活動に関わる

価値の取り扱い方

活動の価値は共有するものではなく、発見する、創造するもの、そして継承したいものもある。活動を継続させていく中で価値は常に仮置きの状態

「価値を言葉にする」を促すものは

時間… 立ち止まる

機会… 描いたり言葉にするタイミングを定期的ににつくる

<まとめ>

本分科会は、評価分科会の後継として「評価」という言葉を使わずに活動や関わりの「価値」にフォーカスし、その表現方法についてをテーマとした。それによって見えてきたのは、「評価」という言葉は「される」ものというイメージが強く、活動や関わりの中から自分自身が感じたことを誰かに語るという営みの安心安全な場づくりを脅かすのではないかと、ということである。何のために、自分たちの実践から若者支援やユースワークの価値を見つけたり創造していくのか。自分の関わりの質を高めていったり、よりよい若者の育ちの場づくりをしていくためであるこ

メンバーが感じていること考えていることを大切に扱われることが、価値を語り合うときに大切な要素である。

で、更新作業をおこなう必要があるのではないだろうか。

関係性… 同じ体験・経験をしている人からの声かけや問いかけ

場… 誰とその場を作るのか。安心・安全な雰囲気醸成

とと、そのための資金調達や政策形成をしていくことは表裏一体である。活動や関わりの外側に誰かが考えた評価軸があろうとも、自分たちの実践により若者たちとの間でどのような出来事が起こり、どのような感情が行き交ったのか。それによりどのような変化が双方に起こったのか。それらを活動に関わる人たちで丁寧に取り扱い、その中から価値を見つけていく。実践を描く・言葉にすることはそうした評価の営みの一つであり、独自の方法を確立していくことが求められているのではないだろうか。

FRINGE企画

会場：らいとぴあ21 ホール(3F)

Day 1 : 2024.12.21 sat 14:30-20:15 / 18:15-20:15 Live event

Day 2 : 2024.12.22 sun am 10:00-12:30

CONCEPT
of Fringe

ーわたしはわたしでいいー

好きなことを表現しあい、生きづらさを分かちあう。

鑑賞ではなく、緩やかな交流を目的に様々なひょうげんを交歓する企画。

表現であそんで交流したり、

作品を巡るアートツアーでアーティストと参加者で対話したり、

様々な「わたし」をたのしみあいましょう。



Fringe YouTube
アーカイブ
作品 Moive



Fringe Web

PROGRAMS of KANSAI Fringe 2024

飲食屋台
マルシェ

クラフト
マルシェ

交流
アート展

交流
ライブ

関西大会全体
OP/INFO
Movie 制作

公募と紹介で表現者（出演・出展・出店）を募集
事前オンライン交流や企画準備の協同

より広い
参画・普及

分科会と同会場でコラボ

自分たちの経済と地域
(屋台) 分科会

表現
分科会

巡り堂
プロジェクト

遊びながら
交流する分科会



… 表現者 …

朝来おかゆ [絵画展示・手づくり雑貨・コミックエッセイ] / 京都

おしてる屋 (ぐれいぷワークス) [イカ焼き] / 大阪

海藤佳子 (労働者協同組合ワーカーズコープ・センター事業団国分寺市立もとまち児童館)
[絵画] / 東京

壊滅的無政府主義バンド "アナーキーズ" (フリースクールはらいふ) [バンド演奏] / 大阪

かもがわ出版 [ブックマルシェ] / 京都・全国

さわいなおき [ポエトリーリーディング] / 愛知

サンポール・マキ [エレキベース弾き語り] / 大阪

日本コーヒーフェスティバル実行委員会 [ハンドドリップコーヒー] / 大阪

創 ~HaJiMe~ Café (社会福祉法人一麦会 麦の郷ハートフルハウス創)

[ORIGINAL柿そぼろ丼・コーヒー・ソフトドリンク] / 和歌山

発酵食堂CHIMACHIMA [オリジナルスパイスカレー・チャイ] / 大阪

八木智大 (HIKU) [映像] / 大阪・フランス

B-MART [雑貨] / 大阪

フルタアキヒコ [イラスト] / 兵庫

MAKI [ライブペイント・イラスト展示・グッズ] / 奈良・大阪

宮部宗泰 [写真] / 岐阜

meglück(めぐりゅっく) [Tシャツ・バッグ・ハーブティー・茶菓子] / 和歌山

ゆでたろう [BGM] / 北海道

… 企画メンバー …

井上啓 (NPO法人ウィークタイ) / 大阪

ちかちゃん (NPO法人エルシティオ) / 和歌山

永井契嗣 (NPO法人エルシティオ、
JYCフォーラム代表理事) / 和歌山

aoinu (Fringe) / 山形・全国

小菅慶子 (いちごとまるがおさん) / 栃木

Mr.マイペース (作品展実行委員会)

… 表現分科会WS …

画材循環プロジェクト

「巡り堂」(みずのき
美術館、学びの森)

[画材配布・清掃体験]
/ 京都



B-MART

【雑貨】



JYCフォーラムin関西2024。

フリンジさん企画「ひょうげん交流企画2024」のマルシェ出店にて、今回初めて参加させて頂きました。

開催中の表現を通じた交流の場は、ひとつの価値観や視点に偏ることのない、なんだか自然で安心な場で、これがお互いを認め合うってことなのかなと、なんとなく、ふんわり感じる時間でもありました。そして、当店で自然と生まれる商品を通じた交流とも、なんだか重なるものを感じたりも、しました。

地域(まち)の中に溶け込みながら、ひらいた場に出没しながら、実践者や対象者という枠組に関係なく、これからも、なんらかのかたちで交流していけたらいいなと思っています。

2日目に画材のクリーニング作業を体験させて頂いた「巡り堂」さん。みんなでクリーニング作業をしながらのお話も楽しい時間でした。プロジェクトのお話を最後に聞いて良かった

ありがとうございました。



第19回全国若者・ひきこもり協同実践交流会in関西
交歓する日常と非日常ー つくる まどう いきる ー
にJCF若者として参加してきました。

21日はフリンジ飲食屋台マルシェにて
自分たちで焙煎したコーヒー2種を提供しました。
22日は暮らしづくりネットワーク北芝さんが開催する
かんぱいマーケットに参加させていただきました。

美味しかった！と2日目におかわりをしてくださった方、
苦くないからミルクも砂糖もなしで飲める！と言ってくださった方、
「美味しい！豆は売ってないのか！！」と戻ってきてくださった方、
美味しかったから違う種類もと、飲み比べてくださった方など、
間近で皆さんの反応を聞くことができ、今後の活動の励みになりました。

隣でイカ焼きを焼いていたおしてる屋さんとは、
ボランティアで来てるという若者と交換留学(?)をしました笑
楽しい時間をありがとうございました。

多くの方が私たちの活動に耳を傾けて下さり、
とても有意義な出店だったと感じています。
話を聞いてくださった皆様ありがとうございました。

(一社)日本コーヒーフェスティバル実行委員会として、
若者が自分の未来を思い描いたり、
自分の可能性に気付いたり、
これからの生き方を何となく掴んだりしていく
お手伝いができたらと思いますし、
安心できる空間や場だと思ってもらっても
嬉しいなと思います。

今回出逢えた皆様、本当にありがとうございました。

日本コーヒー フェスティバル 実行委員会

【ハンドドリップコーヒー】



宮部宗泰

【写真】



おつかれさまでした、そして参加させてくれてありがとうございました。
ほとんど自分の事で頭がいっぱいで、周りの参加者さんのことがみれなかったです。
でも、イカ焼きを食べて少しおちつきました。
説明も上手くできなくてフォローがあって助かりました。
懇宴会は、誰かと喋りたかったのですが恥ずかしくて喋れなかったです、
もっとアピールすれば良かったかな？と今思っています。
2日目の自由アートはまるで子供に戻ったような気分になりおもしろかったです。
次回どこかでやるかわかりませんがまた、作品を出させてください
近かったら参加と交流をふかめていきたいとおもいます。
ありがとうございました



今回郵送による作品展示だったので、
現場に参加している感じは小さかったですが、
ネットを通して色々な作品に触れられて良かったです。
レインボーな色彩のものも多く見られ、
自分の作品との共通点などいろいろ考えさせられました。
皆さんどうもありがとうございました。

フルタアキヒコ

【イラスト】



海藤佳子

【絵画】



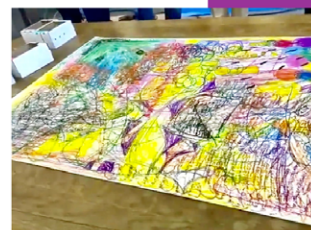
今回も作品出展と、ズームでの参加をさせていただきました！
お忙しい中、準備や配信など、離れていても一緒に居る環境作りをしてくださり、
ありがとうございました

水彩画を出品するにあたっては、好きなモチーフを選びました。
その中の、『デイズ』の花言葉には、
『ありのまま』『無意識』『無邪気』『健やか』などがあります。
私自身、作品を作ることは、
見せるためのもの、作り上げるという方向性になりがちで、その際には緊張感もあり、
他人軸で善し悪しを決めてしまうこともあったと思います。
しかし今回、自分次第で、自己選択ができるということ、ひとつになること、
アートでコミュニケーションをとることなど、出展あたって考えることができました。
デイズのように、等身大でいれたらいいなと、改めて思います。



参加された皆さんの取り組みも、素敵でした！
画材を大切に扱うめぐり堂さんの活動にも感銘を受けました
職場の子どもたちにも、画材に触れ合う機会を増やして、
表現することを自然に感じてもらいたいと思いました

また、MAKIさんのボディーペインティングは、
交流の楽しさや、熱量の共有ができていたと感じます
身体に描いてOKな絵の具やインクはどのようなものを使用しているのか、
お聞きしたいと思いました 私もやってみたくなりました！



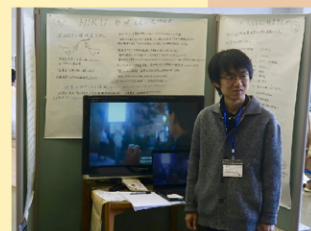
zoomでの参加でした

その感想です

特にボディーペイントを見ていて思ったのだけれども、
その場の気分で参加したり、又は眺めたりして、
自分の気持ちを自由に表現したりしながら
自身の気持ちを眺めたりして
気持ちを整理し整える場なのだと思います
皆さんありがとうございました
お疲れ様でした
zoomやYouTube配信して頂きありがとうございます
m(_ _)m

Mr.マイペース

【企画メンバー】



MAKI

[ライブペイント イラスト展示 グッズ]



「どうしようかな...」

友人から誘われて申し込んだ「フリンジ」。でも、一体何がしたいんだろう？
初参加だったせいで、イベント自体が謎すぎて、自分の立ち位置が分からなかった。
自分は、引きこもりはしなかったものの（時代が許さなかっただけとも思う）
家庭環境により、結構ねじれた人生だったので、
そこに参加する人たちと、共通点はきっといっぱいあるはず。
でも、当事者なのか、そうでないのか分からない私が 伝えられそうなことは何も無いしな...

そんな中、チラシに記された「生きる・まどう・つくる」の言葉。

私にとって「生きる」とは、「体験する」ことだった。

さらに「交流実践会」という言葉を見て、これは一人で完結するようなものじゃないな。

そんな感じがした。

そこで、私が出した答えは、「一方向ではなく、双方向の表現をしよう」というものでした。

●作品展示は、参加者が実際に触れるもの。

●ライブペイントは、見るだけでなく、参加者と一緒に作り上げる。

●物販は...まあいいか。売りたいものがあったら売ろう。

そんな感じで始まった、私のフリンジ。

準備段階から、もう毎日が体験の連続でした。

交流用のSNSグループでは、あれこれ思い悩む自分がいました。

「私、口数多すぎて浮いてないかな？」 「無理言っていないかな？」

「他の人たちは私の思い付きに付き合ってくれるだろうか？」

「うざくない？へんな圧出してない？」とか、私のお馴染みの恐れがめっちゃ出てきました。

...これは戸惑うだ。じゃあヨシ。失敗も恐れも経験として、ヨシ。にして。

そして実際に開催日を迎えてみると... 人の温かさ、交流の大切さを、身を代えて感じた日でした。

イベント当日、特に心に残っているのは、

ライブペイントで「怒り」のポーズを表現してくれた人のこと。

「あーでもない、こーでもない」と一緒に試行錯誤しながら、

その瞬間、まさに「まどう（惑う）」を体験していた。楽しかったなあ。

そして、もう一つ忘れられないのは、ご自身の本番前で忙しいはずなのに、

ライブペイントの悩みに真剣に向き合ってくれた詩人のこと。

いきなり話しかけたにもかかわらず、自分のことはさておき、親身になって考えてくれた。

そこからいろんな話ができて、その時間は楽しくて、温かかった。

他にも、心が動いた瞬間がたくさんあった。

全部書ききれないので、嬉しかったことを箇条書きにしてみる。



【嬉しかったこと】

- ・スタッフのみんなが親切で、温かかったこと。助かりました！
- ・ライブペイントの紙を貼るのを、突然お願いしたのにめっちゃ手伝ってくれた人。助かったし、楽しかった。
- ・作品を見せてくれたり、ご自身のことを話してくれた方々と過ごした時間。
- ・イカ焼き屋さんで飲み水を分けてもらおうとしたら（自販機が見つからず）、後でペットボトルの水を差し入れてくれた青年（きっと自腹だ...ありがとう！）。
- ・グッズを買ってくれたこと、作品への感想をもらえたこと。すごく励みになった。
- ・翌日、誰かがライブペイントの絵に書き込みをしてくれていたこと。一層素敵な作品になっていた
- ・ボディペイントに快く協力してくれた人たちとのやりとり。などなど



そこには、「生きる＝体験する」「まどう」「つくる」がたくさん詰まっていた。

それができたのは、フリンジという場が、温かくて安心できる土壌だったからだと思う。

人が温かくて、場所が心地よくて、のびのび過ごせた1日。

そんな風に過ごせる場所って、すごいな。あらためて、そう感じました。



さわいなおき

[ポエトリー リーディング]

詩人の澤井です！ マキさんと話して救われました 心から

自助グループ教えてもらったから 愛知で探したら

住んでる街にアダルトチルドレンのグループがあったので2月に行ってみるつもり

一番うれしかったんは アルコールなどで僕が胃がんになったり

まきさんのエピソードを色々教えてくれて

自分たちの問題を分かち合えたのかな？って感じたからかな

育児で忙しくて交流少なめな最近だったから余計に希望の灯火を、感じた

マキさんとかと喋って勇気をもらえたことを個人情報話さないようにして

感想をラヂオにした動画です。 良かったら聴いてねー ピース



さわいなおき
感想YouTube



朝来おかゆ

[絵画展示
手づくり雑貨
コミック
エッセイ]

2024年12月21日・22日に開催された全国若者・ひきこもり協同実践交流会、
両日参加しました
オンライン参加やボランティアの方含め、全国から合計約350名の参加があったそうです
やっぱり参加者層はふだん支援職に就いている人や大学の先生、研究者が多かったですが、
それだけでなく、いろんな分野のいろんな実践をされている方々の参加があり、
おもしろかったです

わたしはfringeに参加し、2点絵の展示と手づくり雑貨&エッセイまんの販売をしました
代表のあおいぬさんは「ひょうげん交流」ということを大切にされていて、
大会中もfringe以外のほかの分科会のコーナーにまざってトークさせてもらう
機会をもらったり、一方通行でない居心地のよい場でした

思っていた以上にたくさんの人がまんがや雑貨を手にとってくださりうれしかった

2日目午前中は友だちに店番をしてもらい、
「若者支援とメンタルヘルス支援する／されるを超えて」に参加
この分科会のテーマ、「支援者も同じ時代を生きる当事者である」を考えさせられる
よい内容やったなあと思います

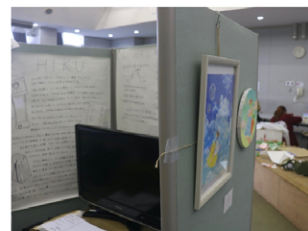
立場を問わない、分け隔てないイベントで、参加してめっちゃよかったです たのしかった

あと、友だちがfringeの展示で自身で考えた言葉
「生きてることがデモ」と書いていたのがよかった
わたしは基本毎日「死にたい!!」となっているのですが「やっていくぞ」と思えます

今回参加して改めて「専門性」という言葉は分断をうむからいやだな～とか考えました
介助の仕事をしているという、
なにか「専門性」が必要な仕事だと受け取られたりするときもあるけど、
(たしかに経験値の差は大きいけど) 経験値や知識量と「よい介助かどうか」は
必ずしも比例しないように思う

なにか「名前のつく人」と相対したときにすぐ「専門家」に対応してもらおう／
「専門家」以外の人に関わっちゃいけない」となるのが悲しい。。
「専門家」のラベリングにところが削られることもある

生きていたら誰でも「生きることの危機」に直面する瞬間はあると思うし、
どんな人も平等に老いて人の手を借りることになるんやから、
そのときできることをみんなで少しずつ助け合えたらいいのに...と思う



aoinu

[企画メンバー]

9回目の全国フリンジ。個人的な集まりなのが、フリンジの良いところだと思う。
前回のぎふフリンジの後から、2024年は助成金申請をしたり、Fringeという任意団体として
事業化、シゴト化を進めている。対外的には組織としての目標や成果やを語るけど、
集団化の違和感。あくまでもずっと「ばらばら」「ごちゃまぜ」の個人の集まりで居たい。
いのちって単語もあまり使うの好きじゃないんだけど、でも何というか、
フリンジの良さって言うか、私が続けてる理由で、むき身のいのちを、手でさわるような
みなさんがそんな表現を、この場に、交流のために差し出してくれること。
そして受け取るみんなが、とても静かでやさしくそれを眼差していること。
いつもそれがあるのがすごい。謎。
活動を持続するためにお金が必要で、今までほぼみんなの自腹で無理してて、
もし助成金とか使えるようになって、大事なことをそのままできたい。
これからもよろしくね PEACE



市場化する若者支援 ―ロールアウト型支援と向き合う―

執筆者：高橋 薫

行政の措置の範囲を限定するロールバック（撤退・切り捨て）型の時代から、より多くの人の社会参加へと国が積極的に乗り出して行くロールアウト（展開）型の時代への流れが世界中で強まっている。中でも日本型の特徴は、全体としてお金をかけず、意欲がある人を対象としたピックアップ型の支援を先行させてきたということだ。若者支援の分野では、これまで期待していなかった働けない・働かない若者へも「市民性」の発揮を期待し、NPO等の民間団体がそれを促す。こうして、行政の委託事業による準市場が出来上がり、そこに新たな競争の原理が生まれ、近年、営利企業も参入してきている。結果的に、そこに乗れない若者・家族は、自己責任で何とかしてくださいというやり方になってしまっていないだろうか。こうした状況に警笛を鳴らす児美川氏の課題提起を元に、今何が課題となっているのかを捉えなおすとともに、課題の改善に向けた方策を考えたい。

コーディネーター

高橋 薫

NPO 法人文化学習協同ネットワーク

東京

阿比留 久美

早稲田大学

東京

課題提起

児美川 孝一郎

法政大学

東京

提起

（1）市場化する若者支援——ロールアウト型支援と向きあう（児美川氏）

①日本の若者支援の前提

日本社会には、新卒採用から職場の中で大人になっていくことを保障する日本型雇用への流れがあった。これに乗れなかった人に対しても、第一次産業や自営業、町工場などの受け皿があったため、大多数の人が「仕事をしている人（社会人）」だった。こうした流れを支えていたのは、右肩上がりの日本の経済状態や女性が結婚や子育てを機に退職していくことで維持された年功序列賃金などのピラミッド型企业構造（ジェンダー不平等規範）などだった。2000年代に入ると、これが崩れていった。欧米では失業問題となったが、日本は非正規雇用の問題として広がった。さらに求職活動をしていないこともニートの条件とし、働く気のない人をあぶりだした。2003年には「若者自立挑戦プラン」が打ち出された。欧米はあらゆる方向から無業者に働きかける積極的労働市場政策（アクティベーション）に力を入れたが、日本はある種の職業マッチング支援や職業能力や意欲を高めることが中心になっていた。日本の若者支援は、かつて「標準」であった価値観をベースにしたまま、若者を就職につなぐことが前提でス

タートしたといえる。

②若者の困難には何があるのか

そもそも働くこと以外の困難を持つ人たちがいる。たとえば、さまざまな要因で親と同居する時期が長期化する人が増えてきている（離家問題）、自分は何とか人並みにやっていけるという感覚を持ってない層が広がっている、18歳で大人とっていない人が多い、孤立感を持つ若者が多いなどの調査結果が出ている。つまり、単に仕事に就くことを支援のターゲットにするだけでは問題が解決しない。

③日本の若者支援の傾向

新自由主義の支援スキームの中には、積極的労働市場政策（アクティベーション）を重視するEU型と日本型のあいだに振れ幅がある。日本では、「意欲のある人」を対象にした人材対策、職業的自立や能力開発が掲げられ、誰もが働ける環境を整えていく社会的包摂とは違う方向性に進められてきた。若者支援政策の先駆けとなった若者自立挑戦プランで、競争力、生産力、社会基盤のための就労ということが堂々と言われていた本質は、現在もそう大きくは変わっていない。同じ時

期に、教育でもキャリア教育が出てきて、就職活動に乗れない人は若者支援が引き受けるということとセットで進んできた。とりわけ大学における支援は完全に民間依存となり、大学キャリア教育と若者支援は平行に、内容的にも共通の方向を向いている。

④何が課題として残されているのか

課題として考えなくてはいけないことは、世界的には排除ではなく包摂という流れがあるが、日本の枠組みはそうっていないということ。つまり、積極的労働市場政策になり切れず、はじめから働くことを義務付けるワークフェアになってきたことだ。

日本の枠組みは、就労だけに焦点化するのではなく、より包摂型の取り組みが必要だった。しかし、メニューがピンポイント型になりすぎ、効果もさほど上がらなかった。どういう形で社会的公正や公共性を担保するのかという問題意識のないまま民間に任せてしまった。また、ヨーロッパと比べて日本の予算額は桁違いで少ない。イギリスではナンバーくじのお金も投入されていたが、日本では、どこから費用を拠出するか議論も少な

い。そして、担い手の問題もある。個々のワーカーの資質や能力を高めることも必要だが、職員が非正規・有期雇用であり、そもそも実践を積み重ねていく足場が弱い。個人だけではなく、どういう団体が役割を担っていくのかということも含めて考えなければならない。

⑤ロールアウト型支援による準市場の多様なあり方の追求を

新自由主義によって支援が後退していくだけではなく、施策を打たざるを得なくなってきたことは世界共通の流れである。かつてのような福祉国家ではないが、政府のお金を入れていこうとしている。受益者負担だけでは展開しきれないから、支援する人たちには公的なお金を回す準市場が形成されていく。しかし、市場機能に任せてとにかく安上がりややっていこうという方向に向かっているのが日本である。若者の学校から社会人への移行を権利として保障するにはどうしていくか。プレイヤーは誰で、どんな規制を受けて、どんな社会的合意をつくるのか。きめ細かな支援を進めていくためには、きちんとそこにお金が出るようにしていく必要もある。

(2) 現場からのリプライ (高橋)

①現場で起きていること

- ・ ネットワークの不安定化…地域のなかで団体同士が連携することを呼びかけても、大手企業は参加せず、ネットワークが成立しない。
- ・ 地域の実践者の分断化…行政の委託は安定性（コンプライアンス）や「見栄え」や数としての「成果」が優先されがち。小さな取り組みが参入しにくい。また、地域のプレイヤー同士が連携ではなく競合の相手になってしまうような構造が生まれてしまっている。
- ・ 自己責任に基づく価値観への傾斜…そもそもどう生きていくのかということは、いろんな人や社会と出会いながら形成されていく。そのための環境を社会がどのように作っていくのか。そういう議論が常にされていなければ、個人の能力や努力を促すばかりになってしまわないか。

会場からの応答と議論 (抜粋)

<若者に届く実践ができているか>

- ・ 自治体の対応が行き届きにくいと感じている。当事者にお金落ちずにNPOや企業に落ちている。

②上記課題を乗り越えるための取り組み

西東京市という人口約20万人の自治体では、若者の参加の場づくりに取り組む人たちとのネットワークが広がってきた。2024年度に、市の地域共生課、就労準備支援事業者、地域コーディネーター（社会福祉協議会）、若者の居場所事業者の有志で勤務時間外に実施する自主勉強会を立ち上げた。「地域共生社会ってどんなこと？」をテーマに概ね2か月に1回集まり、語り合っている。仕組みや制度の使い方を実態に即した形にしておくこと、実態をどう制度に反映させられるかが課題。部署・自治体を越えた自治体職員、関係機関などが話し合う機会になっている。最近では、民間の実践者や近隣自治体職員も複数参加している。

- ・ 今をどう生きていくかという時に、能力を高めるといふ話が出てきてしまうとしんどい。外に出て働いて自立してという方向性が求められが

ち。結局自己責任。

- ・行政の方、学校の方、若者などが集まって話し合う場を継続してきた。その結果、支援というよりも、この若者に「こんな経験をしてほしい」

＜行政と支援団体の関係や委託のあり方について＞

- ・大きな団体が受託してはダメなのか。大きなところのメリットも一定あるのではないか。大企業の参入をどう捉えるか。
- ・自治体と連携して職業体験の場を設けている。小さな取り組みだが課長クラスの方がコーヒー

＜今後向き合うべき課題＞

- ・国や自治体から求められる成果と、実際に直面している中で感じる必要性とのギャップを感じる。アウトカムとしての必要性に沿いながら、どう調整・点検していけばよいのか。（評価のあり方）
- ・大人自身が楽しくなさそうということもある。若者支援をやっている団体を守っていく取り組み

＜こうした議論をひろげていくために＞

- ・社会全体が若者支援を「これが大事」と思ってくれるようなことをやっていかないと「陣地」が広がっていかないのではないか。以前よりは若者支援もだいぶ伝わりやすくなってきている。
- ・議論を広げていくためのキーワードとしてどういう言葉があるか。ロールアウト型支援という言葉そのものや、ロールアウト型支援を上手く活用する動きをもう少しわかりやすく言葉にで

まとめ

ワークフェアという生き残り（選ばれる人間になるための競争）に乗れない・乗りたくない若者に、もう一つの新たな生き方・働き方を十分に試行錯誤できる条件を保障していくならば、人を孤立させていく競争の原理を安易に取り込むのではなく協同という価値観を中心に据えていかなければならない。ならば、営利セクターとの関係はどのような協同の形があり得るのか、あるいは具体的ニーズから生まれた小さな実践とどのように協同していくのか、ということについては議論・言語化が必要だろう。求められる結果（評価指標）は、若者がちゃんと幸せになっていっているのか、構想するシステムが持続可能かということだろう

と声をかけていただいている。

- ・地域で包摂していくとしても阻害されている状態からスタートした時に、再包摂が本人にとって納得がいくことなのだろうか。

を飲みに来てくれる。発信してかかわってもらおうということを実践している。現場に足を運んでもらう関係を行政職員とつくっていくことが大事。

みも必要ではないか。（支援団体・ワーカーの待遇）

- ・企業が若者と出会えないという実態。マッチングだけでは次にいけない人も多い。同じ支援という言葉を使っている実態は違うということも多い。中小企業とどのような関係をつくっていくのか。（共通言語化、働き方）

きないか。私たちは誰で、どこに伝わる言葉が必要なのか。

- ・自分の馴染みの深いところにだけいたのでは駄目だなと思った。それぞれいろいろやっているが、自覚できていないし言葉にしていないし発信もしていないかもしれない。若者支援の実態を知る人がとても少ないのはもったいない。

か。

市場化というキーワードは、若者も含めた地域社会をつくっていく実践に関わる者すべてに関連している。「権利としての若者支援」分科会（協同実践交流会 in 栃木 /2019）では、権利が保障されている状態とは、恩恵を受けていない人も含めて、それが必要だという大多数の社会的合意ができていない状態だという議論があった。若者期を手厚く保障していくために、誰とどのような協同の実践が必要か。その社会的合意を得ていくための、行政職員も含めた議論と取り組みが求められている。

どうなる？自治体こども計画

執筆者：南出 吉祥

こども基本法が制定され、自治体には「こども計画」の策定が努力義務とされています。この「こども計画」策定に向け、全国各地の自治体で検討が進められておりますが、そこに当事者である子ども・若者の声がどのように反映されるのか、「子ども」とは括りづらい「若者世代」（とりわけ学齢期を過ぎた後の若者期）に向けた施策がどの程度盛り込まれるのか、そもそもどれくらい実効性ある計画をつくることができるのか、さまざまな観点からの課題が指摘されてきます。

そもそも「こども計画」以前に、子ども・若者育成支援推進法に基づく「子ども・若者計画」がありますが、それを実際に策定した自治体は限られており、多くは「子ども・子育て計画」「少子化対策計画」など、関連する子ども関連計画の一部に組み込まれる形式となっています。子ども・子育て支援に比べると、「若者支援」は制度的な裏付けも弱く、具体的な自治体施策としてはあまり展開されてこなかったという事情もありますが、今回「こども計画」という名称になってしまうことで、「若者」はいっそう周辺化されてしまうことが危惧されます。

子ども支援にかかわる課題と、若者支援にかかわる課題とは、本来年齢等で区分されるものではないですし、両者は地続きであり一体のものとして実践が展開されてきたという側面もありますが、他方で発達段階・社会環境の違いに即した実践上の違いも少なくありません。

また、こども基本法では「こどもの意見表明権」が強く強調されており、自治体施策においても当事者である子ども・若者の声を聴くよう、何度も強調されています。しかし、そこで「聴かれる」子ども・若者の声はどの範囲まで想定されているのか、当事者の声なき声をどのように汲み取っていけるのか、そうした課題も想起されます。

以上の点を踏まえ、本分科会では、「こども計画」策定に向けた各地の動きをいくつか紹介しながら、自分たちの足元の自治体に対し、どんな働きかけができるのか、皆さんとともに考えていきたいと思います。

コーディネーター

南出 吉祥

岐阜大学

岐阜

中塚 史行

NPO 法人教育サポートセンター NIRE

東京

基調報告

南出 吉祥

自治体「こども計画」で問われていること

現場報告

数名の方に現場の実情を語っていただく予定です

対話

参加者同士で各地の実情を共有

基調報告－南出吉祥「自治体「こども計画」で問われていること」

分科会では、まずコーディネーターの南出より、そもそも自治体における「計画」とは何かということの整理・確認と、今回焦点になっている「こ

ども計画」の政策的位置づけ、そして「こども計画」をめぐる想起される争点が提起されました。

自治体の「計画」というものは、多くの市民に

とって縁遠いものであり、普段目にする機会もほとんどないというのが実情だったりします。そして日々現場で実践展開している実践者にとっても、あまり関心が向けられることは少ないというのが実態です。しかし、各種自治体計画は、当該自治体におけるおよそ5年ほどの政策の方向性を定めていくものであり、そこにこういった文言が書き込まれるかによって、実践現場のあり方も大きく規定されてくるものになります。計画に記される内容の多くは、既存事業を取りまとめたものになりますが、既存事業の拡張や改善、あるいは新規事業を起こそうとした際に、この計画に関連する文言があるかどうか、自治体職員にとっては非常に大きな後ろ盾になってきます。

こうした自治体計画は、計画にかかわる専門家が委員として集められ、自治体により作成された草案をもとに数回程度議論を重ね、原案が確定されます。その原案が「パブリックコメント」として自治体ホームページなどに掲示され、市民からの意見を収集し、最終的な計画が確定されます。公式には、「パブリックコメントにて、住民の皆さんの声を反映しています」とされますが、計画本文はいかにも行政的な堅い文書であり、日々忙しく生活に追われている市民にとっては、なかなか近寄りやすい部分もあります。このパブリックコメントの段階で、計画の内容および論点を市民に分かりやすく提示し、できるだけ多くの意見を寄せていくということが重要な運動課題にもなりますが、パブリックコメントの段階で大きな変更をもたらすことは難しく、もともとの草案・原案段階でどこまで内容を盛り込んでいけるかということが、実質的な課題となってきます。とりわけ今回の「こども計画」では、当事者である子ども・若者の声をどこまで計画に盛り込んでいけるのが争点となっており、各自治体においても、当事者へのヒアリングやアンケートを実施するなど、さまざまな工夫や取り組みが見受けられますが、そのヒアリングがどこで、どのように、誰に対して実施されるのかという点も、きわめて重要な論点になってきます。

以上のような自治体計画の位置づけについての確認をした後、「こども計画」にかかわる各種法律についての説明・概要が確認されました。本計画の作成が明記されているこども基本法をはじめ、子ども・若者育成支援推進法、子どもの貧困

対策法、子ども・子育て支援法、次世代育成支援対策推進法、少子化対策基本法など、「子ども・若者」にかかわるさまざまな法・施策を全体的に網羅したのが「こども計画」になります。この施策群は、国レベルでも自治体レベルでも、教育・青少年育成・地域福祉・児童福祉など、多様な部署にまたがる総合的なものであり、関係部署への照会や文言の調整、他の計画との整合性担保など、膨大な業務が伴いますが、その広域性ゆえ、既存の施策の羅列に終始してしまう場合も少なくありません。しかし、自治体（とりわけ基礎自治体）における施策では、子ども関連施策の数が圧倒的に多数を占めており、若者関連施策はごく一部にとどまりがちで、計画全体としても周辺化されがちです。そのなかで、どこまで「若者」を位置付けていくことができるかという点が、こども計画を考える上で重要な争点になってきます。

そうした課題は、国レベルでも認識されていることが窺えます。2024年9月に実施したJYCサマーフォーラムでもテーマにしましたが、法律上は「こども」とされ、そこに若者も含まれるとされていますが、国の計画である「こども大綱」では、「こども・若者」という表記で記され、「若者」という語をあえて記しています。その理由は明文化されていませんが、もともと若者関連施策がまだ根付いているとは言い難い日本の実情において、子ども・若者育成支援推進法制定以降、少しずつ広がりつつあった若者関連施策の動向を止めてしまってはならないという強い思いがあるように思います。

分科会開催時点（2024年12月）では、すでにいくつかの自治体で素案が公開され、パブリックコメントに付されていましたが、「こども計画」としている自治体もあれば、「こども・若者計画」としている自治体もあり、表題からして多様な状況が窺えます。しかし、いくつか見比べてみる限り、本文の内容に占める若者施策はごく一部にとどまっており、当事者へのヒアリングや調査についても、「中高生」を指して若者としているケースもあるほどです。そうした実情があるなかで、各地域・自治体レベルでどのように「こども計画」の内実を実態に近づけるとともに、若者関連施策を自治体に根付かせていけるのかが、今後の焦点課題になってくることが確認されました。

各地の実情交流について

以上の基調報告を踏まえ、もう一人のコーディ

ネーターである中塚より、策定委員会の委員とし

て選定され活動してきた実情が報告されました。中塚氏は、民間の塾のスタッフや障害児支援などの活動を長年実施し、数年前より当該自治体における子ども・若者を支援するフリースペース事業を委託で運営してきました。その委託事業の関係で、中塚氏にも声がかかったようです。その会議の場で学んだことは、「ちゃんと本音で語れば伝わるし、変えることができる（全部じゃないけど）」ということ。市井の実践者にとって、各部門の偉そうな人が顔を並べる行政の委員会はとても敷居が高く、気軽に発言できる雰囲気ではなかったようですが、思い切って発言してみることで、思いのほかいい反応が返ってきたとのこと。

また、計画策定にあたり、事前に各委員に対して打ち合わせやヒアリングが実施されたとのことですが、その場でできるだけ具体的かつわかりやすい形で課題や提案事項などを伝えたとのこと。提案したことすべてが計画に盛り込まれるわけではないものの、ダメもとで提案してみることも大事だという感触を得たようです。

その後、実際の委員会では、委員のほとんどが子どもの権利条約についてあまり理解していないということがわかり、学習会の開催を提案し、実施にいたったそうです。実際の文面に、「権利主体としての子ども」をはじめとした子どもの権利の理念がどこまで書き込まれるか、「こどもまんなか」「ウェルビーイング」という曖昧な言葉でぼやかされないよう、こども基本法や大綱も参照しながら提言していったとのこと。

その結果、「子どもの権利」にかかわる内容はある程度盛り込めた感触はあるものの、若者分野については具体的な施策や姿勢を盛り込むことは

おわりに

本分科会は、若者に直接向き合う現場における「実践」ではなく、他の分科会に比べると、どうしても敷居の高いものになってしまった部分は否めない。一般的には、「政策／実践」という形で対比されることも少なくないが、自治体施策をどうしていくかという課題は、実際には「自治体を舞台にして政策のあり方をめぐって展開される実践」でもあり、自治体職員との協同・協働も視野に入れつつ、「実践」概念のさらなる拡張を進めていく必要があるだろう。

また、敷居の高さをもたらす要因の一端として、専門的な用語が多用されがちだという点もある。実際に、研修目的で参加いただいた若手の実践者にとって、「わからないことだらけだった」という感想も出され、基本的な用語解説や前提認識の

できなかったようです。権利保障や参加の保障がないままに、「自立」や「社会参加」を促すだけのメニューが並んでしまったということが課題として挙げられていました。

こうした反省を受け、中塚氏からは、JYCフォーラムが主導し、基礎自治体レベルでの若者支援施策の政策デザイン・ひな形のようなものを作成し、発信していけるといいのではないかと、という提案がなされました。また、委員会の場での提案・発言において、JYCにかかわる研究者の用いている語彙や言い回しは非常に参考になったと言います。協同実践の現場を今以上に盛り立てていくために、こども計画をはじめとした行政施策を今以上に押し広げていくことが必要ですし、そのためには、行政に伝わる言葉をもった研究者との協同・連帯をますます進めていく必要がある、という提起で締めくくられました。

以上の報告を受け、参加者の多くが各地の自治体計画に何らかの形でかかわっており、各地の実情がそれぞれ共有されました。自治体の子ども・若者計画に、若者たちの声を反映させていくことを目標に掲げ、委員会の開催やパブリックコメントなどに先立ち、自治体職員向けの学習会や意見交換会を実施してきたケース、計画の検討に際し、部門ごとに分けてその一つに「若者部会」を設けて検討しているケース、子ども・若者へのヒアリングを事業として請け負って実施しているケースなど、計画策定にかかる手続き自体も、自治体ごとでかなり多様であることが見出されてきました。

共有は、より丁寧に実施していくことが必要だということが浮かび上がった。

他方で、今回の分科会への参加をきっかけにして、自治体における各種審議会への傍聴や、パブリックコメントを読み合い、意見交換する企画が立ち上げられたりと、具体的な活動が取り組まれた地域もある。こども計画策定を担当する自治体職員の側も、よくわからなまま暗中模索で実施していることも少なくないので、そうした担当職員とも一緒になって学びあいながら、地域における子ども・若者支援を盛り上げていくという実践を各地各現場から進めていく必要がある。そうした小さな実践の可視化と積み重ねを経ていくことで、支援現場をより豊かなものにしていくための土台づくりが果たされていく。

遊びながら交流する分科会

執筆者：具路 康平

この分科会では、ボードゲームなどの遊びを通じて交流します。なかなか、話だけだと参加しにくかったりする方、遊びたい方、初めての方などが、参加しやすい分科会をやってみたくて企画しました。麻雀、トランプなど様々なボードゲームを準備して、参加してくれる人はやりたいものを持ってきてもらって、皆さんで遊びながら交流できたらと思っています。

遊びには、2つの大事な要素があります。一つは、誰かと楽しむことができることです。遊びを通じて、他者と関わったり、同じものを通じてコミュニケーションをとったり、それが結果として、自分の楽しさに繋がります。そして、二つ目は、脳や体を刺激して、発想力や独創性などを育んだり、心身に安らぎを与えてくれます。一人では考えられなかったことを考えたり、ゲームに勝つために相手のことを読んだり、共に楽しみを分かち合う中で、心が満たされたりします。そして、遊びを通して、繋がった仲間と一緒に過ごすことが楽しくなっていきます。それが、自然と自分や他者の居場所を創っています。そんな何かをしたいという気持ちから、誰かと一緒にいたい気持ちに変わる瞬間をぜひ体感しにきてください。

コーディネーター

具路 康平

NPO

法人エルシティオ えびとおはぎ和歌山

実施場所

らいとぴあ 21

ホールスタッフ：2名

参加者：8人

内容：ボードゲームを通じた交流

意図目的

今回初めて参加する方や話し合いをすることには抵抗がある方、遊びながらおしゃべりすること

が好きな方が気軽に参加できる分科会をつくりたいと思い企画しました。はじめての場所に参加する時に選択肢が増えれば参加しやすくなるのではと考えました。私自身がはじめてのイベントに参加する時に、内容を見てどこに参加するか困ったこともある経験もあり、こういう選択肢、居場所があってもいいのではと思いました。また、遊びを通じて交流することで、世代を問わず楽しみながら仲を深めることができればとも思っていました。ボードゲーム、麻雀などを用意して、やりたいゲームの選択肢が用意されていて、自分のやりたいことができる居場所づくりを意識しました。

オープニングでは、表現分科会やフリンジと共同で、グループに分かれて、一つのアートを作ることに、分科会の参加メンバーも参加して楽しむことができた。今回、会場が同じで、行き来することも含めて、一緒にできたことが良かったです。アートに関しては、参加した人がそれぞれの思いの表現で描いた作品になりました。

分科会が始まってからは、みんなで、ボードゲームと一緒にし始めました。ポケモンカー

ドを持ってきてくれている方がいて、遊びの持ち込みをして過ごしてくれました。これも、この分科会のいいところで、自分のやりたいことを持ってきてみんなと楽しむことができました。そこに、分科会の良さが詰まっていると感じました。また、麻雀ができる人も複数人いて、麻雀も一緒にすることができました。ルールがやっている人により少しずつことなることもあり、相談をしながらやり始めました。ITOという協力しながら、みんなで、お題を順に並べていくというものを行い、それを通じて互いの好みや感覚を共有しながら交流することもできました。また分科会に行ったが、なかなか自分には合わずきてくれたという方もいました。行ってみたが合わないが、少し休憩する形で、遊びながら交流する分科会にきてくれたことが嬉しかったです。意図として、他のところでしんどくなったり、合わない時などに、来れることもこの分科会のよさだと思っていました。



所感

若者・支援者、世代などを問わず、交流できたことがすごく良かったです。遊びを通じて一緒に楽しむことができることは素晴らしいと感じました。普段は子どもたちと遊びながら居場所で過ごしているのですが、今回、初めて遊びながら支援者・若者など様々な世代の人と交流することができました。遊びを通じて、交流することによって、世代に関わらず、一緒に遊んだり楽しんだりすることができるかと改めて感じました。居場所づくりを行う上で、要素のひとつとして、「遊び」は欠かせないものなのではないかと思います。共同実践の中で、子ども・若者などが過ごす居場所の選択肢として、楽しみながら、遊びができることは非常に重要で、大事な要素だということを再認識できました。今後の共同実践や現場にて、また、遊びを通じた交流や関われる居場所づくりを意識しながら、取り組みを進めていければと思います。今回の分科会を通じて、学んだことを活かしながら、

またぜひ、遊びを通じてたくさんの人と交流しながら、過ごしたいです。

今回の分科会を通じて、遊ぶということが単に自分が楽しむものではなく、誰かと繋がり共に過ごすための手段、そして、関わる人の居場所になることを感じました。今回は、遊びだけではなく、表現の分科会やフリンジと同じ空間で実施させていただいたこともあり、ともに作り関わるこ

ともできました。顔の見えるところで共に、創っていくことがすごく良かったです。一緒に創ることを通じて、会場全体が、スタッフにとっての居場所にもなっていたのではと感じました。また、参加していただいた方とも共に創ることができたのではないかと思います。支援者と当事者の垣根を超えて、また分科会も超えて共に創ることができたかと思います。今後も、共につくることを通じて、関わりを広げ、居場所を創っていけたらと思います。

若者支援とメンタルヘルスー支援する／されるをこえてー

執筆者：兵頭 宏美

若者支援にかかわる現場はニーズの高まりから実践そのものはひろがりをみせています。政策的にも、単年度の補助金による運営や、障害者福祉や精神保健福祉などの諸制度を活用して事業運営がなされています。しかし、既存の制度を活用するなかでの実践のしづらさや、経営面や人手不足等、課題は多くみられ、なかでも支援者のバーンアウトや早期離職といったメンタルヘルスの課題が年々みられています。

本分科会では、制度施策の矛盾が実践現場に与える影響について整理し、今後の目指す方向性としての「協同実践」のあり方について考えました。

コーディネーター

兵頭 宏美

社会福祉法人一麦会

和歌山

実践報告

深谷 弘和

天理大学

奈良

西川 友理

大阪キリスト教短期大学

大阪

起田 陽子

Rehabilitation Design

大阪

報告①支援者のメンタルヘルスをめぐる政策的影響

深谷弘和さん（天理大学）からは、NPO 法人大阪障害者センターが2019年に行なった障害者福祉現場の職員を対象とした調査をもとに報告いただきました。その調査では、福祉の仕事をしんどいと回答した人は約7割だが「今の仕事に満足している」という回答も同じ割合の回答だったそうです。つまり、障害者福祉の仕事が楽しくてやりがいはあるけど、しんどいという特徴があることがわかりました。深谷さんの研究（報告）では、「障害者福祉の現場で働いている職員さんのメンタルヘルスに新自由主義の政策が影響を与えているのではないか」という仮説が掲げられており、その新自由主義政策の影響は「支援する／される」の関係性にも影響を与えられているのではないかと問題提起がなされました。

新自由主義政策が与えた影響として、福祉の政策では1990年代から社会福祉基礎構造改革が進められてきた背景があります。2000年に社会福祉法が改正され「措置から契約へ」と社会福祉制度の在り方そのものが抜本から変えられました。市町村が窓口になり、公的責任を縮小することを目指したものです。規制緩和が生じ、営利企業の参入が可能となったものこのときです。

公的に今までやっていたものを市場原理に開放し競争により経済の活性化を図ろうとしました。

障害者分野では2006年に障害者自立支援法が制定され、応能負担から応益負担となり、事業所の収入は日払い方式（出来高払い）の導入がなされました。市場原理、お金に基づく考え方を職員が内面化してしまうことで、職員間がギスギスし職員がどんどん個別化されていってしまいました。

「事業所を利用する側が事業所を選べる時代」という名目で始まった制度ですが、今や事業所側が手間をかからない人 この人は障害区分は重いけどこれくらい作業ができる人等、事業所側が利用する人を選んでいる矛盾もみられます。誰でも同じように対応できるようにマニュアルを作ろうとすると、マニュアル通りに「できる職員」と「できない職員」評価が行われてしまい、「効率的にできる／できない」といったお金の中の市場原理下でのルールが当たり前になってしまう現実があります。

メンタルヘルス不調になってしまった場合、「あなたが健康管理できなかったからだよね、ストレスマネジメントが出来ていなかったからだよね」となり、人手不足や早期離職が生じると「リクルートがちゃんと出来ていない、現場で育成ができていなかった」と言ったように、現場で生じている実践のしづらさが自己責任論でまかなわれる、負のスパイラルが生じてしまっているのではない

か、と自分に合わなかった、仕事が上手くできなかった、効率が求められ書類仕事をこなすことに追われ、職員同士がバラバラになり、集団で実践を深めていくといった時間が割けずにより職員が個別化されていってしまっています。

支援する職員が、法律にのっとって支援すればするほど、どんどんひとりぼっちになっていく、

報告②当事者研究をはじめとした対話の場の実践報告

西川友理さん（大阪キリスト教短期大学）からは支援の当事者研究会「わやの湯」の実践を報告いただきました。（※当事者研究とは、2001年頃から北海道浦河町の「べてるの家」で始まった自己治療、自己統治のツールであり、「自分の身の処し方を仲間の力を借りながら、自分のことを自分自身がよりよく知るために研究していこうという実践」です）

「わやの湯」は自分の考えていることや悩みを研究テーマとして提案し、それに対して参加者同士で聞きあって共有する、という場です。自分の言葉や主観的な見方を大切に扱われる経験ができ、様々に聞くことで自分のなかから言葉が生まれてきます。西川さんは、「わやの湯」は話をする場というより聞き合う場ではないかと話されています。人の話を聞くと、いろんな言葉がおもい浮かび、他の人の話を聞くことによって話したくなることが大事なのではないかと考えているそうです。最初は聞き手として参加し、しっかり聞い

という現場の矛盾、しんどさといった現状を乗り越えていくためには、支援する一されるという関係性乗り越え、「協同」で実践を深めていくことが、福祉の現場で起きているメンタルヘルス不調や人手不足や内面化している市場原理を克服できる、ひとつのきっかけになるのではないかと提起がなされました。

てもらえる場なんだと体感的に理解することで自分も話したくなる、聞くことはケアすることでもあり、ケアされることでもあるという実感があるとのことです。「わやの湯」では、解決はしないが、解消することはある。苦労や悩みをデータを広げように出し合い、それを眺め、わいわいと対話を重ねている。そのなかで、「囚われていること」が「興味のあること」に変わり、「個人の悩み」が「社会や集団の課題」になり、「孤立」が「連帯」へと変わっていくという当事者研究の理念に基づき話されました。

「わやの湯」で取り上げられる「研究（話題）」の一例を紹介していただきました。

- ・「ダンドリアンとの付き合い方研究」 段取りを立てたがってしまう。こうしなければならない、と思ってしまう自分をどう扱うか
- ・「休み方研究」 どういう状況を休みと認識しているのか、上手に休むとはどういうことかを考える

【質疑応答】

Q 傷つき体験を重ね、自己肯定感が非常に低い方の自己評価の低さに対して「そんなことない」と伝えても、好意的にその言葉を聞くことができないと思うのですが、どうしたらいいと思いますか？

A そんなことないかあるかはその人の主観なのでこちらはどうともいえないが、それより、聞いてもらえた、という経験が大事なのではないか。「共感」の難しさは確かにあり、聞く技術が求められる、と改めて思っています

Q 子ども・若者分野のスタッフが当事者研究にこない理由はなぜだと思いますか？

A 「できない」ことがあることをみとめることが大事と思うのだけれど、「支援しなければならない」「助けなければならない」という気持ちが強すぎて、その結果「子ども・若者に対して、大人として正しくあるべき自分」というところか

ら軸足を外すことが難しくなり、なかなか自己開示できていない気がします。

Q わやの湯の西川さんの聞く技術について教えて欲しい

A1 一人一人が別の国の人だと考えます。全然違う国の文化を知りたいと思う気持ちで話をしているのでしんどいとか困ったとかいう事も各々の国の内政のあり方を興味深く知る気持ちで聞いています。

A2 自分はいかにできない人か、ということを隠しません。それに体調悪い時の方がうまくいく。無理やからみなさんお願いします、という方がいい。自分が力を抜く、ということで、「そういう空気なんだ」「そういう場なんだ」と思ってもらえると思います。

報告③「みんなの図書室ほんむすび」シェア型図書室ときどき保健室

起田陽子さん（Rehabilitation Design Lab / みんなの図書室ほんむすび）からは「みんなの図書室ほんむすび」シェア型図書室ときどき保健室（以下、ほんむすび）の実践について報告してもらいました。

ほんむすびの事業理念は「生まれてから終わる間際まで、より楽しいを共につくる」です。リハビリテーションとデザインの意味から、人間らしく生きるための設計を重視しており、「自分で選べる」ことが人間らしさであり、楽しい選択をする権利を性別や障害の有無に関わらず、誰もがその権利を持っていると考えています。ほんむすびでは、一箱本棚オーナー制を導入し、オーナーが

店舗運営やイベントを行える場を提供します。また、医療福祉従事者が心身の悩み相談を行う「まちの保健室」も設置。

起田さん自身の前職での経験として、「なぜ（身体が）こんなふうになるまで?」「こんな状態で家に帰って良いのか?」など、病院の枠での限界を感じたことから、生活・暮らしの空間での関わりの重要性を認識されました。また、本を通じて世代を超えた交流が生まれ、本に興味をもってもらい、ふらっと入りやすい環境をつくることで、参加のハードルを下げることを目指されています。

具体的な実践の様子について

- * 居場所の相談所・・・月に不定期で開催、利用者は27人。主に若者が多く、悩みの内容はキャリア、心の悩み、ただ話を聞いてほしいというのが中心。相談所の時間だけでなく、普段の会話の中でふと悩みを話す方が話しやすいと考えています。
- * 社会的処方・・・病気に対しては薬、孤独にはつながりを処方。地域の活動やサークルを紹介し、対談形式で地域の人々の話を聞くイベントを実施。参加者と共におむすびを作り、顔の見える関係性を築きます。
- * 誰かの居場所のひとつになる。働き出すと好きなことを自由に、利害関係なく自分が好きなことをいえる機会は減っていきます。来られた人が棚ごとのカラーの違いを楽しみ、「違うからこそおもしろい」を体感できるようにと考えています。
- * 街の人のケア

自己表現として、駄菓子屋が「こどもと一緒に店番」を行い、貸切イベントで本棚オーナーがコ

ロナで中止になった祭りを再現しています。スタッフがやりたいことを実現し、こども相談室では子供の悩みを子供同士で理解し合う場を提供しています。街の人同士のケアが重要で、日常生活の中で普通の人々が店番をし、子育ての悩みを共有し、互いに支え合う関係が形成されているそうです。

このような実践を可能にしてきた背景を、起田さんに整理していただきました。

- ①楽しさ・おしゃれ感・・・気軽に参加でき、何かあった際に頼りやすい。
- ②主体性の育成・・・参加者が主体的になれるよう、運営側があまり介入しない。
- ③安心感の提供・・・課題を解決しようとせず、共に考える姿勢を大切にする。現状を肯定し、自由に自己表現できる環境を整える。
- ④私設運営・・・助成金には制約が多いので、緩やかに長続きさせたい。自分自身も他者に任せるところを学んでいるところです、と報告されました。

【質疑応答】

Q 地域の居場所について質問。開放的な場を設けたいが、参加者が入りにくいです。どうすれば?

A 自由に過ごすことを促すと、何をしたいかわからない。実は本以外にもゲームを用意していて、子どもはちょっとゲームして帰っていく。何か参加のきっかけを作っておくことが大事かもしれません。主体性が育つってなかなか難しいので、安心感を提供することがまず大事だと思います。

Q 保健室ではどんなふうに相談が始まりますか?

A ふらっとこられて気軽に話すことも、予約することも可能。予約の場合は閉じた空間で聴く場合もあります。その時に誰が相談役なのかということがしっかりわかるようにしています。

まとめ・今後の課題

支援者も当事者も、各々の立場をこえて同時代に生きる仲間として、自分たちのメンタルヘルスについてともに考えることの出来るきっかけになればと思います。この分科会の企画に至りました。制度の矛盾によって支援をすればするほど業務や書類作業に追われる支援現場の報告、立場を問わず「支援」について考えて話し合う「当事者研究」の報告、地域での支え支えられる関係性を紡ぐ図書室&保健室の報告と、それぞれ切り口は違えどJYCの目指す「協同実践」にヒントをもらえる実践報告だったと思います。

短時間ではあったのですが、参加者の皆さん同士でも交流の時間をもつために、4グループに分かれ登壇者も参加しながら意見交換・交流を行いました。そのなかで、当事者の方や支援者、家族会の方、学生、院生と参加者層も多岐にわたります。

した。そのなかで「職員の間での温度差や仕事量の差など、もやもやしてしまうことがあるけどこれは個人の問題ではなく制度の問題であるということが分かった」「地域の人とつながる方法を模索したい」「支援する職員も周縁化されているため、社会にそもそも声が届きにくいのではないか」「はたらきにくさについて職場ではなかなか共有できない」「今日の議論をもっと身近なひとたちとも話したい」「現場の職員だけでなく、経営者のメンタルヘルスも課題となっている」等、さまざまな意見がありました。

今回に引き続き、メンタルヘルスの課題に目を向けながらその解決の糸口としての「協同実践」のあり方について考え議論する場をもち続けたいと思います。

